

十勝地域の縄文土器概観

The view of Jomon pottery in Tokachi area

北沢 実^{*1}・大鳥居千鶴^{*2}

Minoru KITAZAWA・Chizuru OTORII

I はじめに

十勝地域の先史土器の体系的な分類・編年は、1983年に帯広市で本格的に埋蔵文化財調査事業が開始されるに当たり、佐藤訓敏が中心となって作成した「土器群の分類・編年」(佐藤ほか 1985)が唯一である。これは、当時得られていた十勝地域の断片的な資料を、北海道内の他地域の資料で補完しながら縄文・続縄文・擦文土器に3区分し、このうち縄文土器は7期22の階梯に細分されたものである。この分類・編年は、帯広市はもとより管内各町村で行なわれた発掘調査においても標準として用いられることが多く現在に至っている。爾来、十勝地域で発掘調査された遺跡は83ヵ所¹⁾、調査面積は約28万㎡にのぼり、この間の資料の蓄積には目覚ましいものがあり、新知見も枚挙に暇がない。また、近年はAMS法による¹⁴C年代測定が積極的に取り入れられ、とくに草創期～前期前半のデータが充実しつつある(表1)。

本稿は、これまでの発掘調査等で蓄積された十勝地域の縄文土器を8つの様式に大別し、これを集成・概観することで研究の現状を整理し、当該期土器研究の基礎的データとすることを目的としたものである。なお、本稿はII-4・5を大鳥居、他を北沢が執筆した。

II 各期概観

1 草創期相当の土器群(図1)

2003年に実施された帯広市大正3遺跡(帯広市教委 2006)の調査で出土した資料群であり、土器付着炭化物のAMS年代は12,000~12,500 yBPが示された。本資料の発見により北海道における土器の出現が更新世末期まで遡り、道東の内陸地域にまで波及していたことが明らかとなった。

出土した土器は10数個体と推測され、器形が推定可能な個体は底部に乳房状突起をもつ丸底で、丸味をもって立ち上がり、口縁下部がややくびれ、口唇に向かって外反し、最大径を口唇部にもつ。サイズは器高・口径とも20cm前後の大型品と、同じく10cm程度の小型品がある。文様は口縁部と体部とに区別され、口縁部文様には櫛目状の連続押圧(1)、角度を変えたり重複させるような爪形文(3~5)が施され、隆帯が貼り付けられたもの(3~5)もある。体部文様は米粒状の爪形文(1・

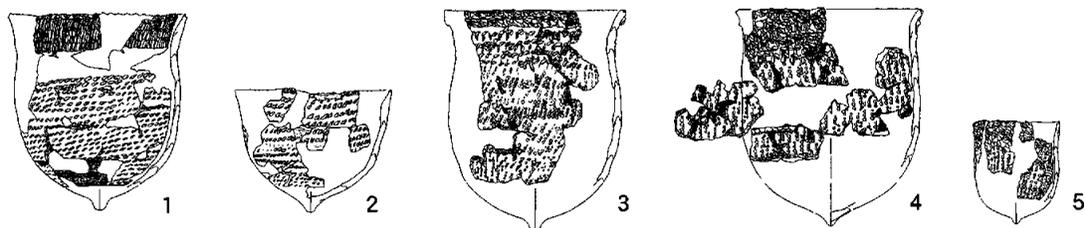


図1 草創期相当の土器群(縮尺=1/8)

出典: 1~5 帯広市大正3

*1 帯広百年記念館, *2 北海道考古学会会員

2) や、施文具不明の三角形が3個1単位となる押圧文(3~5)がある。これらの様相は、本州のそれと共通するところが多いものの、文様構成等には独自の特徴もみられるとされる(山原 2008)。この土器群は本州の爪形文系土器と近縁関係にあるものと考えられるが、次に述べるテンネル・暁式土器群とは系統的なつながりを見出すことはできず、AMS値で約3,000年間の空白が生じている。

2 早期前半の無文・貝殻文・条痕文系平底土器群(図2~6)

テンネル・暁式、沼尻式、下頃辺式、東釧路I式、大楽毛式、石刃鍬文化期の土器群である。この様式ではテンネル・暁式の編年位置を巡るさまざまな論議があったものの、平底土器群の最前列に位置づけられることでほぼ決着をみた(北沢 2008 ほか)。しかし、テンネル・暁式土器の出現及び終末の様相²⁾、各型式間の編年・系統など未解明な点も多い。

(1) テンネル・暁式土器群(図2・3)

無文を基調とし、条痕などによる縦位の器面調整が施され、底面にホタテガイ殻表圧痕が付せられることを特徴とする平底の土器である。筆者は帯広市八千代A遺跡資料を中心にテンネル・暁式I~IV群(以下、暁I~IV群)に細分(北沢 1999)し、絡条体による文様・条痕の出現を指標として古期段階(暁I群・II群)、新时期段階(暁III群・IV群)に大別した(北沢 2008)。十勝地域では30ヵ所の遺跡の資料が報じられている³⁾。

古期段階のうち暁I群に相当する資料(1~20)は、Ta-d火山灰下層から出土する帯広市大正6遺跡(帯広市教委 2005)、同市八千代A遺跡2・4地点(帯広市教委 1990)、池田町池田3遺跡(池田町教委 1994)資料群を典型とする、器壁が比較的薄手で無文もしくは草本類の茎などによる条痕(せんい条痕)のみの土器と、これに沈線、円形刺突が施文されたものである。

1~3は大正6遺跡出土の器壁が5mm前後と薄手で、表面が丁寧に調整された無文の資料群。口唇および底部の平面形が長円になるものがあり、底角は張り出さず、底面のホタテガイ殻表圧痕の出現率は高い(8/9)。胎土は緻密で細砂粒がやや多く含まれるなどの特徴がある。この資料群の出土層位はTa-d火山灰下位のソフトローム下部~ボール状ローム層上面であり、共伴した石器の製作技術・形態等に既知の資料と相違がみられること、得られたAMS年代値⁴⁾などから古期段階の最古相とみられる。

4~20は、器壁は5~8mm前後、13・17に示したような底部の内面に指による刺突や押し引きが施されたものが多いことを特徴とするグループで、口唇および底部の平面形が長円もしくは隅丸方形になるものが相当数ある。無文ベースと条痕ベースの資料があるが、条痕は池田3では僅少、八千代2・4地点でも少数(22/114)である。文様要素には円形刺突と沈線がある。この段階に見られる円形刺突は直径2~3mmの小さなもので、これが単独の場合は口唇直下を巡る(6・7・12)。沈線には矩形や幾何学的な構成で施文され、矩形の沈線と円形刺突が組合せになるもの(5)、胴上半に斜格子状に描かれたもの(10)があるが、細沈線や不規則なもの(4・11)、条痕との区別が困難なものもある。口唇は平坦に調整されたものが多いが、円形刺突(4)・爪による刺突(20)が施された資料もある。日高・胆振地域に分布するテンネル・暁式相当資料は、この段階の資料とみられる。

暁II群相当の資料(21~42)は、器壁は8~10mm前後とI群よりやや厚手となり、底角が張り出すものが多く、直径5mm前後の前段階より大振りの円形刺突文に特徴をもつ。出土層位はTa-d火山灰の上下であり、次に述べる絡条体圧痕が施文されたグループと共時性をもつとみられる資料も含まれるが、無文を基調とするがゆえに位置付けが困難な資料が多数ある。器面は無文(21~30・36~42)と繊維もしくは集合沈線様の条痕をベースとし、これに円形刺突、沈線、底部付近に指による刺突などが施文されたものがある。円形刺突は棒状の工具によるものが多く、28は口縁と体部の2段

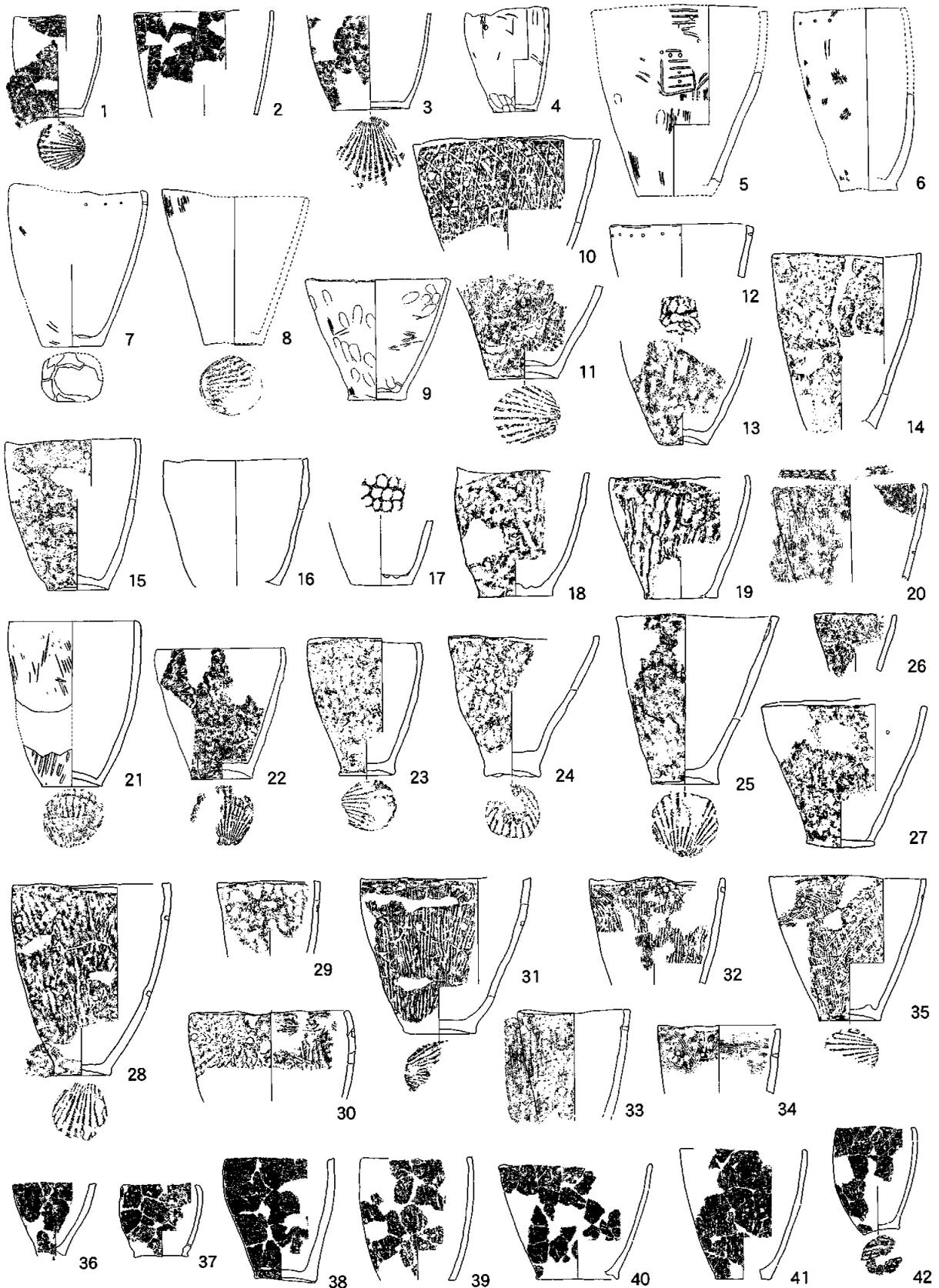


図2 テンネル・暁式土器群(1) (縮尺=1/8)

出典：1～3 帯広市大正6, 4～9 池田町池田3, 10・12・16・17 帯広市八千代A2地点, 11・13～15 帯広市八千代A4地点, 18・19・23～35 帯広市八千代A1地点, 20 帯広市川西C, 21 浦幌町平和, 22 帯広市暁, 36～42 帯広市大正8

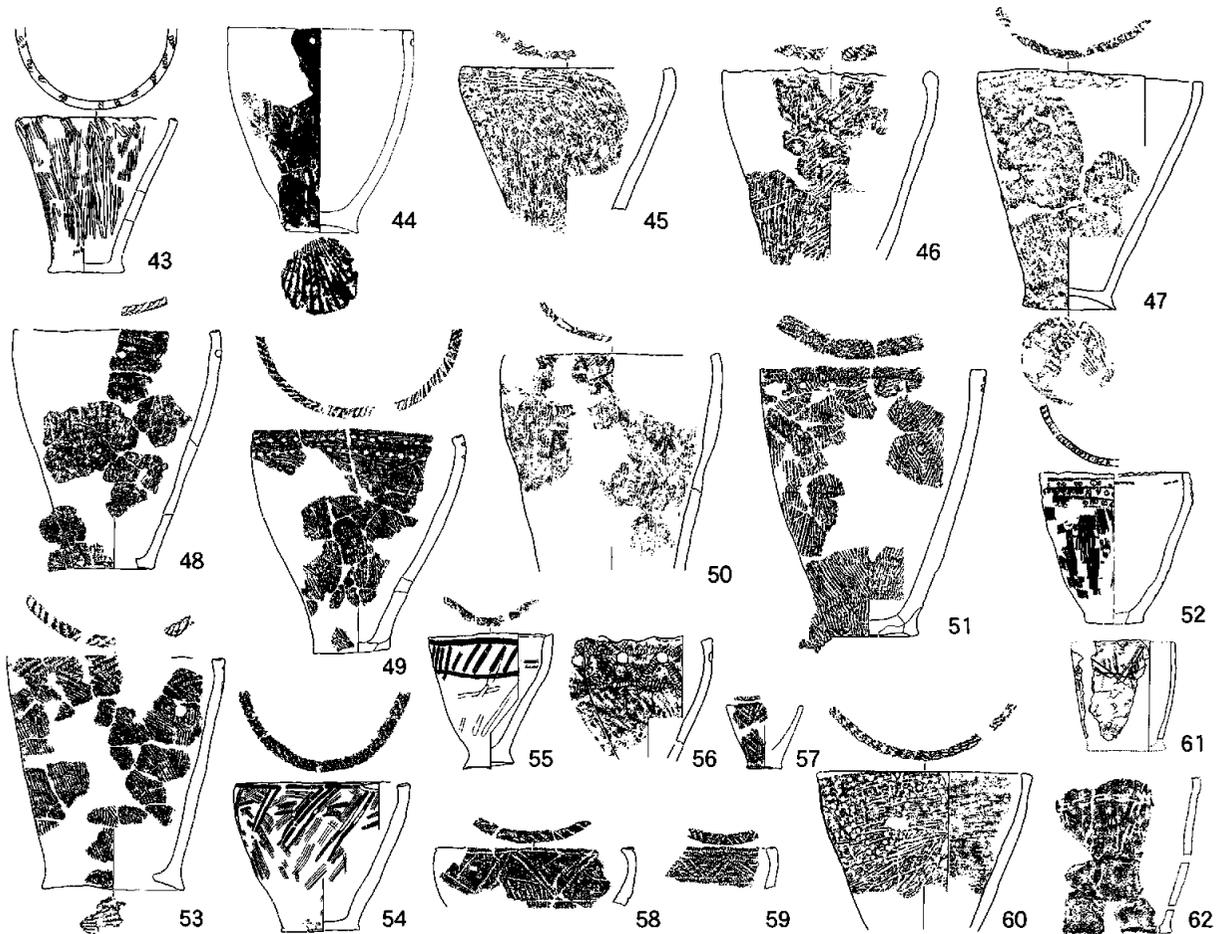


図3 テンネル・曉式土器群(2) (縮尺=1/8)

出典：43 帯広市曉, 44 帯広市八千代C, 45~47・50・52・53・55~60 帯広市八千代A 1地点, 48・49・51・54 帯広市大正8, 61・62 清水町東松沢

に施文される。34・35など条痕が縦横あるいは斜位に交差し器面装飾の意図が窺える資料は新相の要素とみられる。36~42は帯広市大正8遺跡(帯広市教委 2008)でTa-d上層より出土した無文の資料群で、表面にナデ調整が施され胎土に花崗岩粒を含まない一群(40・41)と、これを多量に含む一群があり、後者は48・49・51など絡条体圧痕が施文された土器と共伴する。

新期段階は八千代A遺跡1地点出土資料を典型とする絡条体圧痕文が施された資料群である。出土層位はTa-d火山灰の上下であり、絡条体圧痕文は下層段階で出現し、上層で盛行したものとみられる。器面は無文と条痕ベースがあり、条痕には絡条体原体を工具としたものが出現するが、判別の困難な資料も多い。また、絡条体圧痕が刺突やキザミに置換されたとみられるものがある。

この段階は絡条体圧痕が口唇や体部の一部にのみ施文されたもの(曉Ⅲ群相当, 43~48・50)と、口縁部文様帯が形成されたもの(曉Ⅳ群相当, 49・51~60)があり、後者が終末ころの様相とみられる。絡条体圧痕による口縁部文様のモチーフは口唇と平行、斜位、山形、矢羽など多彩で、これに各種の刺突が組合せとなるものがある(北沢 1994)。60は円形刺突が大きな鋸歯状に施文されたもので、石刃鎌文化期の土器群との関連が想起される。51・52など絡条体による横位多段の押引が施された資料は、沼尻式との関連が指摘される(後藤・山原 2008)。61・62は清水町東松沢遺跡(清水町教委 1998)出土の破線状沈線が施文された本幸式相当の資料で曉Ⅳ群並行とみられる。

(2) 貝殻文系平底土器群(図4)

沼尻式に相当する横位多段の貝殻腹縁文、波状口縁の頂部から垂下する刺突列を特徴とする土器群である。本類は8ヵ所の遺跡出土資料が報じられ³⁾、大樹町下大樹遺跡(大樹町教委 1965)からは複数の復原個体、八千代A遺跡5地点(帯広市教委 1990)からは文様にバリエーションが豊富な資

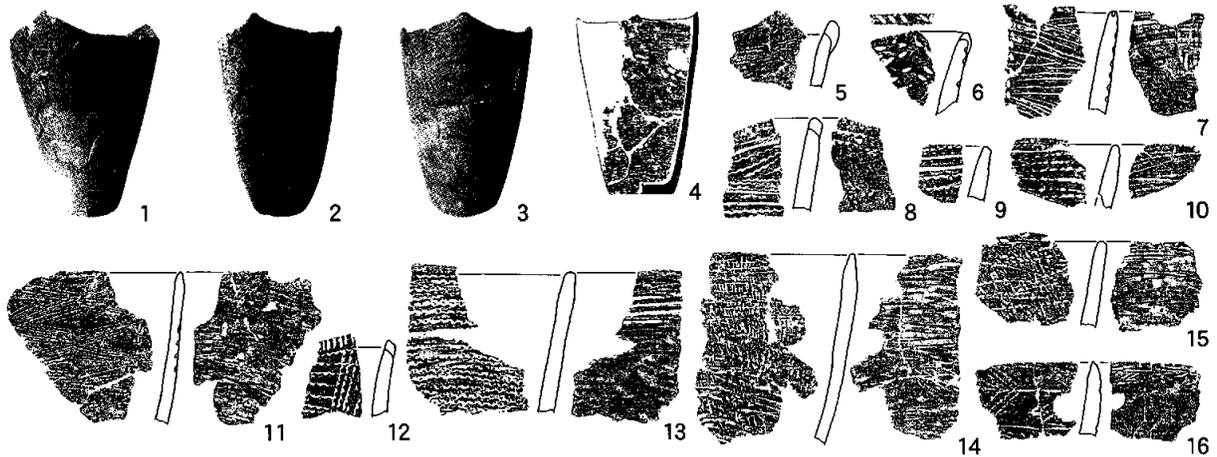


図4 貝殻文系平底土器群 (縮尺: 1~3不同⁵⁾, 4≒1/8, 5~16≒1/4)
 出典: 1~4 大樹町下大樹, 5~15 帯広市八千代A 5地点, 16 帯広市八千代A 2地点

料が出土しているが、多くは断片的である。

1~4は下大樹遺跡出土の復原個体⁵⁾。いずれも2~4ヵ所の頂部をもつ波状口縁で、口縁部に条痕が斜位に交差するように施されたもの(1)、無文で波頂部から底部付近にかけて長さ1cm程度の刺突列が胴下部まで垂下する(2)、口唇の上面形が角形になる無文(3)などがある。

5~15は八千代A遺跡5地点、16は同2地点資料。調査報告書では写真図版のみを掲載し、既述を省略したので個々に記載する。5は突起部が肥厚し、横位の細かな貝殻腹縁が施文される。6は突起部がわずかに肥厚し、口唇にキザミ、口縁部には動揺の施文具によるとみられる刺突が施文される。7は大きな波状口縁とみられ、波頂部から垂下する縦位の刺突が施され、口縁部には斜行する沈線が施文される。8は大きな波状口縁とみられ、口唇に沿う沈線と平行沈線間に貝殻腹縁が施文され、内面には腹縁を押圧して施文される。11は大きな波状口縁とみられ、波頂部から縦位の刺突が垂下する。文様は細沈線で菱形に区画され、区画内に貝殻腹縁文が同形に充填される。12は口唇上にキザミが施され、口縁には縦位→横位の貝殻腹縁文が施されたもの。14は口唇断面は尖り気味で、口縁には縦位→横位の貝殻腹縁文が密に施され、下位は縦位の貝殻腹縁施文後に施された横位の調整で文様が不鮮明である。15は斜位の条痕が施された後、貝殻腹縁文が施文される。16は横走沈線と斜位の貝殻腹縁で矢羽状に施文された資料。これらの八千代資料群は前出・後続の資料群との関連が想起されるものが含まれるが、位置付け等の検討は今後の課題である。

(3) 無文・条痕文・沈線文系平底土器群 (図5)

いわゆる下頃辺式、東釧路I式、大楽毛式に相当する器面調整が横位に施された土器群で、21ヵ所の遺跡の資料が報じられ³⁾、復原個体も多い。この類は器形・文様等から明確に弁別することが困難なものも多く、前述の型式を想定しつつ次の3グループに整理した。

1~7は沈線が施文されたグループ。1~3は下頃辺式の標識資料で、底部から口縁に向かって開く器形で、口縁は緩い波状を呈し、文様は口縁から底部付近まで波状気味の沈線が不連続に施される特徴をもつ。6はこれに器形が近似する体部上半に条痕、下部が無文の土器⁶⁾。7は矢羽状の沈線が多段に施文されたもので、施文は上位から順に施される⁷⁾。沈線が施文された資料は後述する無文・条痕文系土器群中に少量が含まれる。

8~59は清水町上清水2遺跡(道埋文 1991)、豊頃町高木1遺跡(道開拓記念館 1989)、八千代A遺跡2地点⁸⁾(帯広市教委 1990)資料群を典型とする無文・条痕文系の土器群。この類の条痕は貝殻を工具としたものはみられないようで、柁状の木片が用いられた可能性が指摘された(平川 1989)。内外面に施された条痕は横位に施され、これは器面調整を主目的としたものとみられ装飾的



図5 無文・条痕文・沈線文系平底土器群 (縮尺: 59⁹⁾・63¹⁰⁾ は不同, 18~23・64~71=1/6, 他=1/8)

出典: 1~4 浦幌町下頃辺, 5~7・58・59・63 大樹町下大樹, 8~23 清水町上清水2, 24~34 帯広市八千代A2地点, 35~47・70・71 豊頃町高木1, 48~52・60~62 浦幌町平和, 53・54 清水町東松沢2, 55 清水町共栄3, 56・57 浦幌町吉野, 64・65 帯広市曉, 66~69 音更町友進

意図は窺われない。条痕が施されない資料も横位のナデ調整が施されたものが多い。

器壁は5～8mm前後と比較的薄手が多く、器形は下頃辺的な開くもの（8など）が少量あるが、多くは底径と口径の差が比較的小さく直線的に立ち上がる筒形で、底角が張り出す資料がある。口唇の断面形は頂部は平らか幾分丸味をもち、外側が削られたようなものも多く、口唇上にキザミが施された資料が少量ある。口縁は平縁、波状、小波状があり、この類が多く出土した上清水・八千代・高木の資料群での出現頻度は平縁＞波状＞小波状である。上清水2では当該期の資料504個体中沈線が施文されたものが2.1%（17～23）あり、高木1資料には器面全体に幾何学様の沈線（45）や口縁部に鋸歯状に施文されたもの（46）、八千代A資料には横走・鋸歯状・幾何学様に施されたもの（32～34）が極少量が含まれる。56は指頭による横位の調整で器面の凹凸が著しいもので、釧路市大楽毛1遺跡出土の大楽毛式（釧路市埋文セ 2001）に特徴的にみられる要素である。

60～71は微隆起線もしくは貼付が施された資料。薄手で焼き締った硬質のものと、やや厚手で一見粗雑な感じの資料がある。この類は東釧路I式相当と混在するような出土状況である。浦幌町平和遺跡出土資料（浦幌町教委 1971）の微隆起線は口縁部に波状もしくは山形に施文されたもの（60・62）と、体部に縦位に施文されたもの（61）がある。63は下大樹遺跡出土の口縁上端に瘤状の貼付が施されたもの¹⁰。高木1遺跡には口縁部に豆瘤状の貼付が施された資料（71）がある。

（4）石刃鏃文化期の土器群（図6）

女満別式、浦幌式に相当する石刃鏃石器群に伴う型押文、絡条体圧痕文、無文もしくは条痕文土器群である。この土器群は十勝では7ヵ所の遺跡で出土し、浦幌町共栄B遺跡（浦幌町教委 1976）、帯広市大正3・7遺跡（帯広市教委 2006）からは遺構群を伴う良好な資料が出土しているが、「浦幌式」の標識遺跡である浦幌町新吉野台細石器遺跡はいまだ未報告であり、全貌が明らかにされていない。

この土器群はテンネル・暁式土器群より新しく、東釧路II式より古く位置づけられるものの、貝殻文平底土器群、無文・条痕文平底土器群との関係は必ずしも明らかとはいえず、また、この土器群中の新旧関係も明確とはいえない。この土器群のAMS年代は炭化物試料で7,300～7,400 yBPが示されている。

型押文が施された資料は大正7遺跡から出土した1例のみである（1）。これは横位の条痕をベースに、断面三角形の施文具によるスタンプで口縁部に鋸歯状の文様帯が構成されたもので、暁IV群（図3-60）に類似した文様構成がある。

絡条体圧痕文が施文された資料（2～17）は、器形は平縁・平底の深鉢を基本とし、小突起をもつもの、小さな波状を呈するものがあり、口唇直下が貼付により肥厚する資料（13～15）がある。口唇の平面形は長円もしくは隅丸方形を呈するものも多く、舟形に近いとみられるものがある（4）。口唇断面は平坦なものも多く、口唇に絡条体圧痕が施文されたものが多い。底角は張り出すものも多くみられ、底面に木葉痕が残されるものがある（10）。絡条体圧痕はすべて単軸で、暁III・IV群にみられるものよりも撚りが細かく繊細な印象である。無文ベース（2～4）と条痕ベースがあり、いずれも内面には条痕が施されたものが多い。条痕の工具は貝殻が多用されるが、判別しがたい資料もある。

絡条体圧痕は口唇および口縁部に施文され、口縁部に平行に数段（2）、口唇直下に縦位・斜位もしくは山形、この下位に平行に数条が施文されたもの（3～11）など比較的単純な構成のものと、平行に施文された絡条体圧痕間を鋸歯状に区画し、この中を短い絡条体圧痕が充填されたやや複雑な構成のもの（16）があり、後藤秀彦（1991）は前者を浦幌I式、後者を同II式とした。II式は新吉野台細石器遺跡（後藤・佐藤 1975）のほか、大正3遺跡資料に類例があり（14・15）、八千代A遺跡出土の暁IV群に近似した構成の資料（図3-59など）がある。17は最大径を体部上半にもち口縁が内傾する器形で表・内面ともミガキによる調整が顕著に施される。文様はラフな沈線で口縁部が区画さ

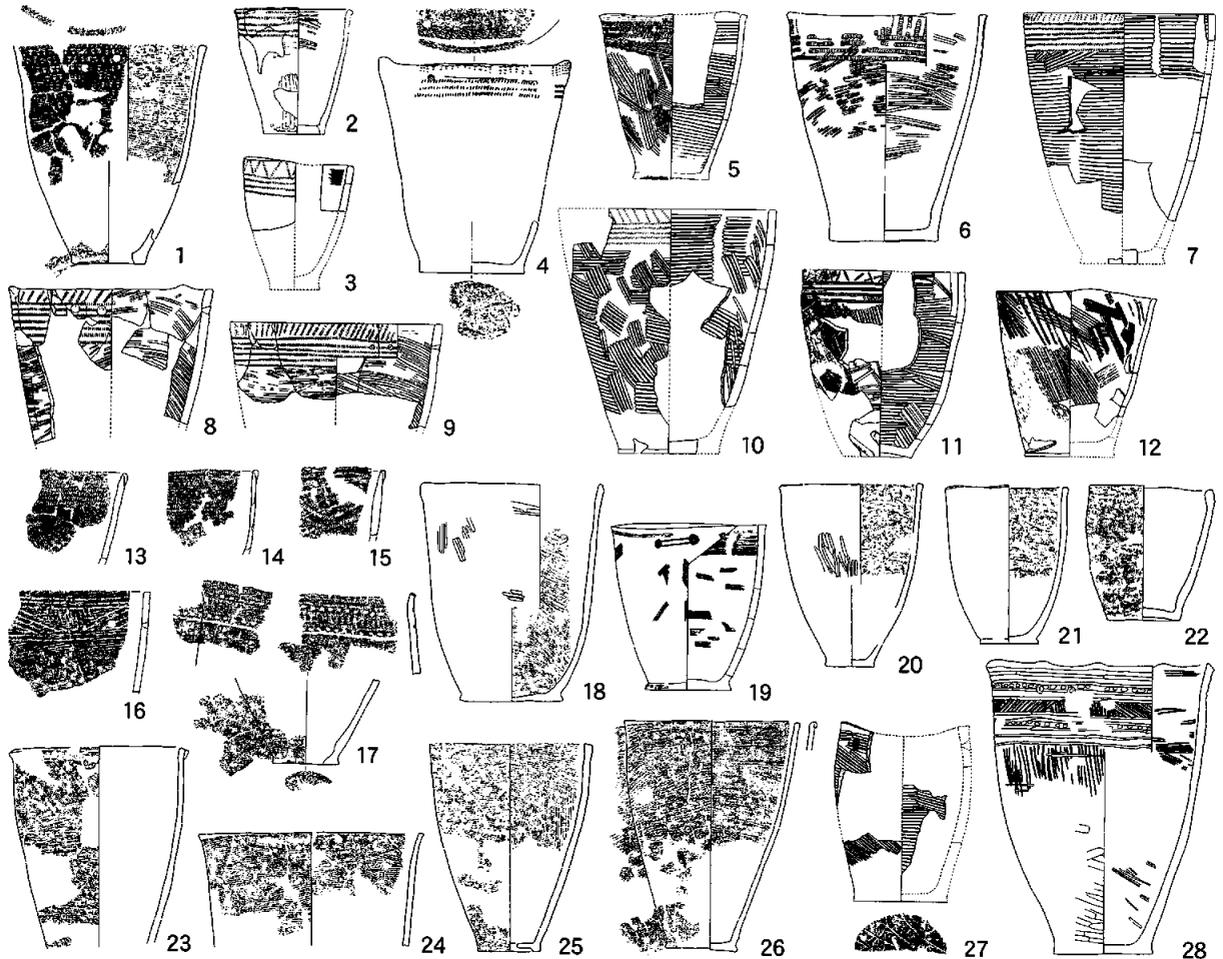


図6 石刃鎌文化期の土器群 (縮尺 \approx 1/8)

出典：1・4・17・18・20~26・28 帯広市大正7, 2・13~15 帯広市大正3, 3・5~12・19・27 浦幌町共栄B, 16 浦幌町新吉野台細石器

れ、この間に横位の絡条体圧痕と押引文、縦位の短い絡条体圧痕が施文された異質な資料で、道西南部に類例がある。

18~28は無文・条痕文・沈線文のグループ。器形や条痕は絡条体圧痕文の資料群と大差ない。底面に木葉痕が見られる資料が共栄B資料にある(27)。無文資料(18~22)のうち18・19は内面に条痕が施され、19は口唇にキザミ、口縁部の補修孔間が沈線で結ばれる。23は口唇直下に鏢状の貼付帯が巡る。28は波状口縁で沈線と浅い刺突、押引きが施文された大型の深鉢で、アルトリ式に類似する。

3 早期後半の縄文系平底土器群 (図7~9)

東釧路Ⅱ式~Ⅳ式に相当する土器群で、多様な縄文が出現・盛行し、この段階以降、十勝を含む道東地域が道西南部と共通した「土器文化圏」に含まれる。この土器群は東釧路Ⅱ式、同Ⅲ式、コッタロ式、中茶路式、東釧路Ⅳ式の5型式に細分され、各型式への移行は漸移的に辿ることができる。

(1) 東釧路Ⅱ式・Ⅲ式に相当する土器群 (図7)

大正遺跡群V群1類土器(北沢 2005)に相当する東釧路Ⅱ式、Ⅱ式とⅢ式の要素をもつ資料、Ⅲ式を包括した資料群である。この類はおよそ30ヵ所の遺跡出土資料が報じられ³⁾、とくにⅡ式相当の資料が大正8遺跡の調査(帯広市教委 2008)で150個体程度出土し、復原個体も多数得られたことにより十勝地域での状況が明らかとなったが、これ以外の資料は断片的なものが多い。AMS年代値は大正8遺構炭化物試料で7,000 yBP前後が示されている。

1~25は東釧路Ⅱ式に相当するとみられる資料群。十勝地域ではこの型式の特徴とされる内面に

条痕が施された資料はほとんどみられない。大正8資料は器形は平縁・平底を基本とし、口唇や底面の平面形が隅丸方形や長円を呈するものがある。底角は張り出し、24のように張り出し部に指などの押圧が施され、底面が歯車状になるものが多い。また、底面に縄文や突引などが施文されたものが約30%ある。内面はナデ調整が施されたものも多く、条痕が施された資料はない。地文は縄文が縦位・斜位・横位に方向を変えて施文され、羽状風の構成になるものがあり、縄文原体はLRもしくはRLであるが、左右異なる撚りの縄を撚り合わせたものもみられる。文様は地文のみ(1~6)、縄線文(7~13)、沈線(14・15)、刺突・突引(16~18)、貼付(19~24)などがある。これらのうち16・17など体部に多段の文様構成をもつものや、貼付が施されたものはこの類では新相の要素とみられる。

26~30は東釧路Ⅲ式の特徴である組紐圧痕文と短縄文が施されたグループ。29・30は短縄文+組紐圧痕文、26・27は短縄文により多段の文様構成となる。Ⅲ式の特徴とされる口唇断面が外に張り出す資料は清水町共栄3遺跡資料(北埋文 1991)などにみられるが、多くはないようである。音更町木野台地遺跡(杉山 1966)からも復原個体が得られているものの、この類の資料は断片的である。

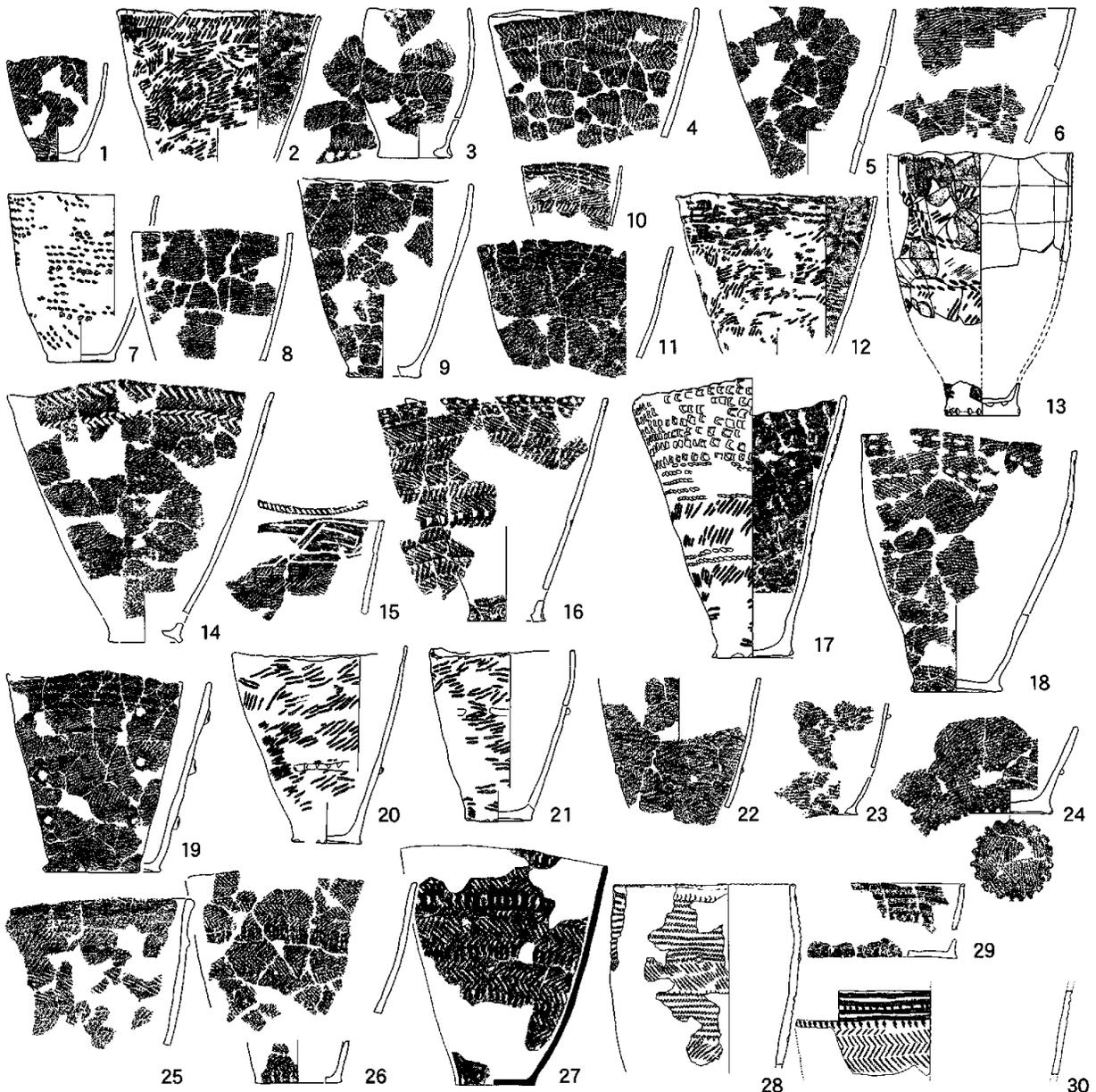


図7 東釧路Ⅱ式・Ⅲ式に相当する土器群(縮尺=1/8)

出典：1~12・14~24・26・29 帯広市大正8, 13 浦幌町吉野, 25 帯広市大正7, 27 浦幌町平和, 28 池田町十日川5, 30 音更町十勝川温泉1

(2) コッタロ式・中茶路式に相当する土器群 (図8)

貼付帯もしくは微隆起線に特徴をもつコッタロ式・中茶路式相当の土器群で、およそ20ヵ所の遺跡の資料が報じられている³⁾。

1・2はコッタロ式とされた資料。1の貼付帯は横位と一对の波頂部から垂下する太目で、この上にキザミが施された東釧路皿式的なもの。2は口縁部に不連続な縄線文が施文され、地文は不規則な横走縄文。十勝地域ではコッタロ式の典型とみられる資料(大沼 1986)は少ないようである。

3~20は多段の横環する貼付帯もしくは微隆起線が施された中茶路式相当の資料群。3~7は縄文施文後にやや幅広の貼付が施され、貼付上にキザミもしくは縄圧痕などの文様が施文された中茶路式の古相のグループ。3・6は結束羽状縄文が地文で、6の底部付近には短縄文が施文される。7の貼付は口唇直下は横位、この下位は縦位に施される。

8~19は横環する細い貼付帯もしくは微隆起線が施されたもの、この間に縄文、短縄文(9・10・13・14)、絡条体圧痕文(11・17)などが施文された資料群で貼付帯をもたないもの(11・17)もある。8は波状口縁で地文は結束羽状縄文。14はボウル状の鉢形で、貼付帯は縦位・横位に施され、この間を2条交差の絡条体圧痕が施文されたもの。15~17は一括資料とみられ、17は縦・斜・横位の絡条体圧痕と綾絡文が施文される。19の貼付帯は口縁部に限られる。20は無文地に横位の貼付帯が施されたもの。

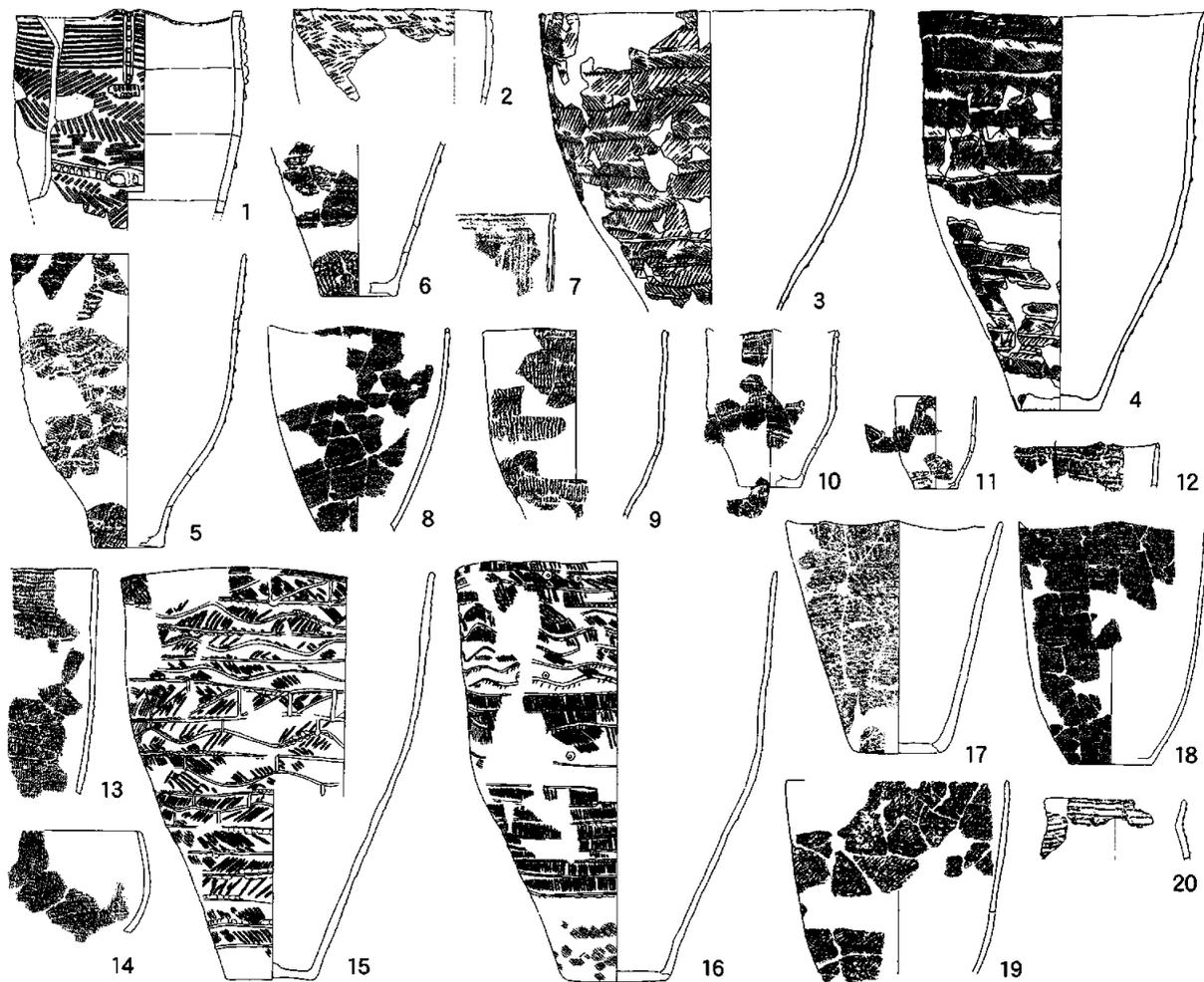


図8 コッタロ式・中茶路式に相当する土器群 (縮尺 \approx 1/8)

出典：1 浦幌町新吉野台細石器, 2 池田町十日川5, 3~6・9~12・20 清水町共栄3, 7・13~17 帯広市大正7, 8・18・19 帯広市大正8

(3) 東釧路Ⅳ式に相当する土器群 (図9)

この土器群は微隆起線や貼付、沈線など中茶路式の要素が残る浦幌町吉野遺跡Ⅴ群 (浦幌町教委 1978)、幕別町古舞4遺跡資料 (幕別町教委 1984)、帯広市大正3遺跡墓壙出土資料 (帯広市教委 2006) などが古相に、次いで自縄自巻縄文などで整った施文がなされた資料、新相では口縁部に文様

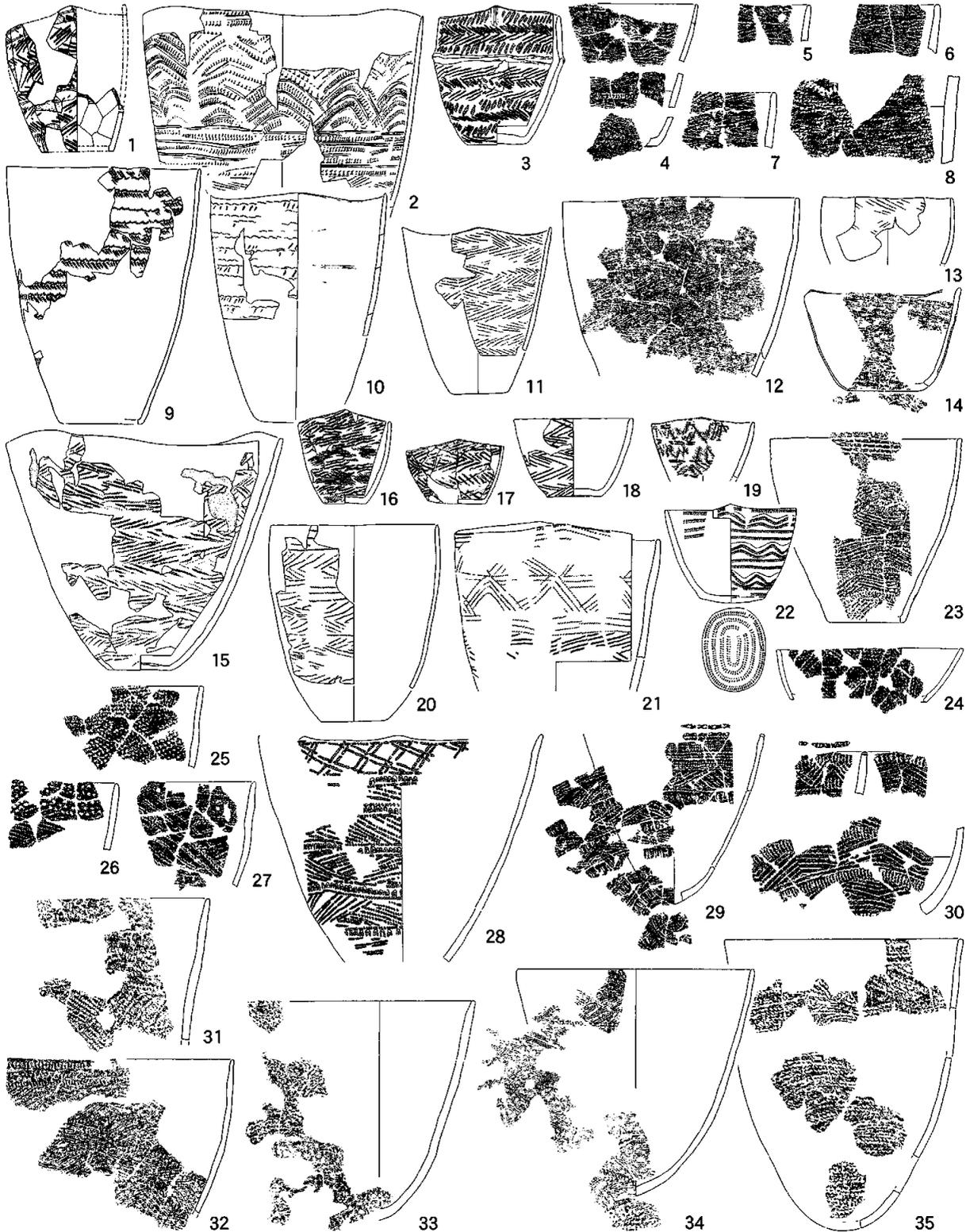


図9 東釧路Ⅳ式に相当する土器群 (縮尺: 5・8・25~27・30≒1/6, 他≒1/8)

出典: 1 浦幌町吉野, 2・10・11・13・20 幕別町古舞4, 3・14~16 帯広市大正3, 4~8・24~27・29・30 帯広市大正8, 9 幕別町札内N, 12・21 帯広市川西C, 17・18 音更町十勝川温泉1, 19 帯広市稲田1, 22・23・31~35 幕別町札内K, 28 帯広市チョマトー

帯が設けられるなど装飾的な文様が出現し、終末では器壁が厚手で胎土に繊維を含み大振りな文様が施文された丸底器形となる。とくに終末期は帯広市大正8遺跡、幕別町札内K遺跡（幕別町教委2005・2008）など近年の調査で良好な資料の出土が相次ぎ、次段階への移行の様相が明らかとなった。

1～8は前段階からの移行形態を示す古相の資料群。1は微隆起線が口唇直下と体部に数条が施された小型土器。2は体部上半に沈線が横位・山形に配され、この間に縄圧痕が施文される。9・10の綾絡文が施文された資料も古い段階とみられる。3は波頂部から太く短い貼付による隆帯が施された小型土器。4は口唇直下に痕跡的に微隆起線が残り、体部には横位の絡条体圧痕、5～8は微隆起線間に自縄自巻縄文が施文され、いずれの地文も自縄自巻縄文による。

11～15は整然とした縄文が横走もしくは羽状風に施された資料群。IV式中では最も多くみられるグループであるが、復原個体は少ない。16～19は小型土器、19は魚骨圧痕が全面に施文される。20～27は縄線文・縄端圧痕で体部に文様が施されたもので、装飾的文様が出現するのは新しい段階とみなされる（遠藤2008）。24は縄線文が口縁と体部に横位、この上下に菱形に施された舟形器形の平底。縄線文+縄端圧痕（23）・縄端圧痕（26）・多軸絡条体（25）・異なる撚りの縄を2条並列した原体の圧痕（27）なども新しい要素とみられる。

28～35は終末ころの資料群。28は小さな平底と思われ、口縁部は縄線文で菱形構成、これ以下にはループ状の縄圧痕が5列施文されこの間を縄文が充填される。29～35は砲弾形に近い器形。このグループは胎土に繊維が含まれるものが多く、地文はやや太目の原体による縄文・自縄自巻縄文、2条並列した原体によるものなどがある。口縁部に縄線文や絡条体圧痕で文様帯が構成されたもの、異なる撚りの縄を2条並列に横位に押押し文様帯が多段に構成され、この間を絡条体圧痕やループ状の縄圧痕が施された資料などが次段階への移行を示す要素とみられる。

4 前期前半の繊維尖底丸底土器群（図10）

口縁部に前段階の文様構成を残し、東釧路IV式に後続し、胎土に繊維を多く含む尖底もしくは丸底の土器群である。

（1）綱文土器の前段階に位置づけられる土器群（図10-1～6）

東釧路IV式土器の新相資料から綱文土器への移行を示す前期初頭の資料群。本類は幕別町札内K遺跡（音更町教委2005）、帯広市大正3遺跡（帯広市教委2006）より復原個体が得られている。

器形は大型で深鉢形を呈し、底部は丸底もしくは尖底気味となる。胎土に繊維を含み、器壁は厚手なものが多い。口縁は平縁、口唇に棒状工具による押圧（1）や縄圧痕（2・4）が施され小波状となるものもある。口縁部に文様帯を有するものでは、絡条体圧痕文（3）、縄線文により鋸歯状（4）となる例がある。地文には羽状縄文で菱形を構成するものもある。2・5は横環する押引文が地文間に施された資料。

6は口唇部直下7mmに横位の沈線、その間に斜位の刻み目が施され、口縁部に沈線で二重の円が描かれ、地文は無節の斜行縄文。道央部の美沢3式に類似した資料と考えられる。

（2）いわゆる綱文土器のグループ（図10-7～38）

前段階の口縁部の文様帯は消失し、器面に太目の縄による文様が全面に施されるようになる。筆者は当該土器群を芽室町小林遺跡出土の土器をもとに、胎土に繊維を含有する丸底で、横走縄文と斜行縄文が主体となり、複数の施文方法をもつ土器が伴う土器群「綱文土器のグループ」とした（西澤2000）。この土器群のAMS年代は遺構炭化物試料で5,700～6,000 yBPにほぼまとまる。

7は地文にコンパス文、刺突文が施された道南部の石川野式に相当する資料である。

8～38は胎土に多量の繊維を含み、器壁が厚く、底部は丸底や尖底気味になる「綱文土器のグル

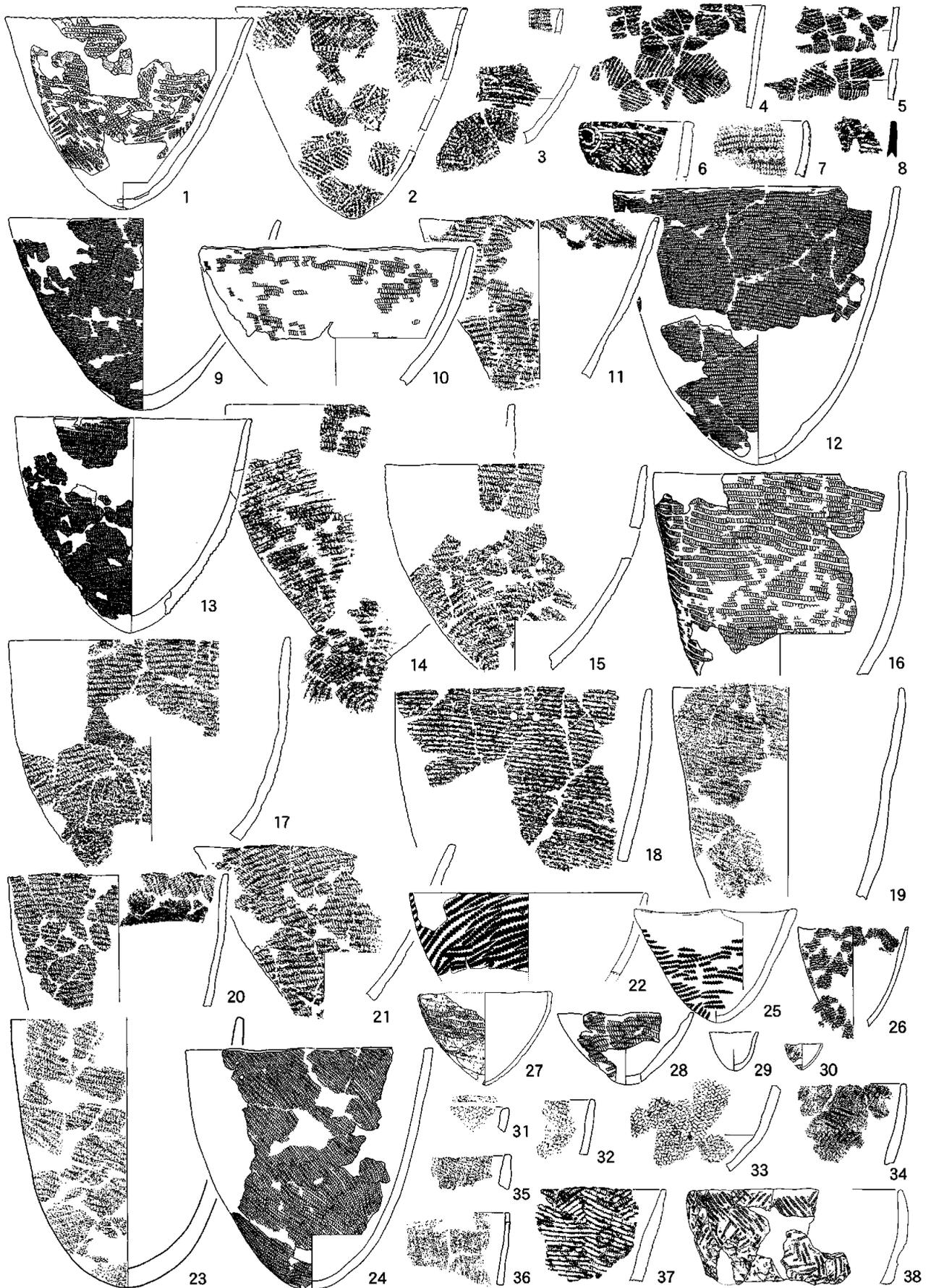


図10 前期前半の繊維尖底丸底土器群 (縮尺：6・7≒1/6, 他≒1/8)

出典：1 帯広市大正3, 2・3 幕別町札内K, 4・5・11・14・15・17・18・20・21・26・29 帯広市大正8, 6 大樹町下大樹, 7～10・12・16・19・23・24・28・31～36 芽室町小林, 13 清水町上清水4, 22・25・27・30・37・38 音更町十勝川温泉1

ープ」である。器形は口縁に向かって開き気味に立ち上がるもの（9～11・21・22）と垂直気味に立ち上がるもの（8・12～20・23・24）があり、口縁は口唇が平坦に調整され平縁が多い。サイズは口径が40 cmを超える大型品や20 cm以下の小型品（25～30）がある。地文は0段多条の太い縄によりRLもしくはLRの横走縄文（8～20・25～28・30）、斜行縄文（21～24）が主体を占め、組紐回転文（31～33）、結束羽状縄文（34）、縦走縄文（35・36）、羽状縄文（37・38）も少量みられる。ポウル形に横走縄文が多く、砲弾形に斜行縄文が多い傾向にあるが、胴部下半では縄文が錯綜する場合もある。横走縄文には節の磨消し（14など）が施された資料もある。8は口縁部の文様に山形の刺突文が施されたもの。内面は磨きやナデにより調整されたものや縄文が施されたものもある。

このグループは古相に横走縄文、新相に斜行縄文が施された資料が位置づけられ、新相に羽状縄文や組紐回転文が共伴すると考えられている。

5 前期後半～中期中葉の平底土器群（図11・12）

道西南部の円筒土器下層式や道北部の押型文・刺突文・櫛目文土器の影響を受けて、十勝において独自の展開をとげた平底土器である宮本式土器へと移行し、その後道西南部の影響を受けた土器群へと移行する。

当該土器群は帯広市若葉の森遺跡（帯広市教委 2004）出土資料をもとに設定した「若葉の森土器群」（西澤 2004）のⅠ～Ⅳ群を基本とする。

（1）宮本式土器（図11-1～41）

宮本式土器は帯広市宮本遺跡の土器を指標とし、佐藤訓敏（1986a）により『縄文尖底土器群以降～縄文中期のモコト式土器・「北筒式土器」との間隙を埋める縄文前期後半の土器型式』として仮称された。さらに佐藤（1987）は、文様構成をもとに分類を行い、道中部の植苗式土器の頃に本土器群を位置づけた。若葉の森遺跡の報告の中で、筆者はこの土器群を若葉の森Ⅰ群とし、器形をもとに文様構成と地文から分類した。

これによると器形は底径が小さく口縁部で内湾するa類（1～15）、底部から直線的に開くb類（23～40）、底部から外傾し胴部が直立、口縁部が内湾するc類（16～22）があり、底部は平底となる。サイズは大型品から小型品まで揃う。文様は多様となり肥厚帯、隆帯、沈線文、刺突文、貼付文、縄線文の6種類が組み合わせられ、地文は無節斜行縄文、単節斜行縄文、無節羽状縄文、単節羽状縄文、合燃縄文、反燃縄文、燃糸文、無文の8種類がある。1は口縁部波頂部より垂下する2本の貼付が施文され、粘土の上塗りがみられる。19は口縁部に肥厚帯が加えられ、凸帯上部に沈線文や円形刺突文が加えられ、胴部に押型文と燃糸文が施されたもの。41は横走沈線文に刺突文の施された資料で当該期に分類したが、後期の土器の可能性もある。

当該土器群は繊維尖底丸底土器から円筒土器下層式の影響を受けて平底化したと考えられる一群であり、岐阜ⅡA群のように多様な文様要素をもつものである。古相にはa類が想定され、その後植苗式に類似する凸状隆帯が口縁部をめぐるもの（16・19など）やb・c類の器形が位置づけられると考えられる。

（2）押型文・刺突文土器（図11-42～51）

道北・道東を中心に分布する押型文・刺突文・櫛目文が施された若葉の森Ⅱ群相当の土器群であり、19のように胴部に押型文と燃糸文が施された資料の存在から多くは宮本式土器と共時性をもつものと考えられる。

42～48は押型文土器である。古い段階に胎土に繊維や燃糸を含み、42・43のように口縁が内湾するものが相当する可能性がある。次の段階に器形から44が考えられ、新しい段階に47・48の資料が

位置づけられそうである。47は器形は体部上半に緩やかにくびれ、口縁部に幅広の肥厚帯をもち、文様は横位の矢羽根押型文である。

49～51は刺突文土器である。これらは押型文土器と同様に胎土に繊維や燃糸を含むものが古く位置づけられると想定され、49・50の資料が相当する可能性がある。50は櫛歯状工具による刺突文である。51の下から上へ向けた刺突文が施された資料は、シュブノツナイ式の新しい段階に新しく位置づけられると思われる。十勝での資料数は少なく、今後の類例を待ちたい。

(3) 円筒土器上層式に相当する土器群 (図12-1～21)

円筒土器上層式の影響を強く受けた土器群である。筆者は若葉の森Ⅲ群とし、口縁部の文様構成を中心に次のa～d類に細分した。

a類：1は肥厚帯上に鋸歯状貼付が施文された資料。器形は口縁部が外反し、口縁は小突起となる。鋸歯状貼付上とこの間に燃糸圧痕文が施される。十勝において円筒土器上層式そのものと言える唯一の資料である。

b類：2～5は肥厚帯上に縄圧痕、肥厚帯下部に押引や沈線が施文された一群。貼瘤が肥厚帯上や下部に施される場合(3)もある。オサツ式・厚真1式土器に類例が求められる。

c類：6～15は肥厚帯や貼付が施文された一群。口縁は山形や突起となるものが多い。8・9は肥厚帯上に縦位の圧痕や刻みが施文される。10～14の貼付は文様帯を区画するものや山形頂部から八の字・直線的に垂下し、貼付上には縄や指頭、竹管状工具による圧痕が施される。15は口縁部に貼瘤が施された資料。

d類：16～21は貼付をもたない一群。器形は口縁部が外反するもの、直線的に開くものがある。口縁は山形や平縁があり、口唇は刻みや竹管状工具による刺突、縄の圧痕が施文される。地文は単節斜行縄文、単節結束羽状縄文、反燃縄文がみられる。

この土器群は、器形は口縁部が外反し、口縁が肥厚し、口唇が切出し状となり、地文は結束羽状縄文が多い傾向があり、円筒土器上層式に併行するものと考えられ、なかでもa・b類は古く位置づけられる。

(4) モコト式土器に相当する土器群 (図12-22～43)

円筒土器上層式以後、北筒式土器の前段階に位置する土器群である。筆者は若葉の森Ⅳ群とした。

22・23はモコト式土器の前段階に位置すると思われる土器群で、22は智東式土器、23は天神山式土器に相当するとみられる資料である。22は口縁部に幅の広い肥厚帯が施され、肥厚帯上と口唇に半截竹管状工具により押引が施文されたもの。23は口縁は山形突起、口唇の稜上に沈線が施された資料。十勝地域の資料数はきわめて少ない。

24～43はモコト式土器に相当する資料。器形は口縁部がそのまま開くもの(33など)、外反するもの(43など)、胴部の膨らみが大きいもの(36など)の3種類がある。底面は平底(35など)・揚底(29など)・底角がやや張り出す資料(30)もある。底角や底面に縄の押圧や縄文が施文されたものや、内・外面に突起があるものもある。地文はLR斜行縄文が多く、綾絡文もみられる。内面は調整痕が明瞭なもの(28)や縄文が施文された例(33・36など)もある。筆者は若葉の森Ⅳ群の中で文様を中心にa～d類に細分した。

a類：24は口縁部の貼付上に縄の圧痕が施文されたもの。口縁は山形突起となるものも多く、口唇に縄の圧痕や刺突が施文される。口縁部の肥厚するような貼付上に縦位の縄の圧痕が施文され、山形頂部から垂下する貼付や貼瘤もみられる。

b類：25～32は貼付をもたない一群。口縁は平縁が多く、口唇に刺突、押引、刻みや縄の圧痕が施文される。口縁部に横位の押引や刺突文が施文されるものもあり、垂下する場合もある。



図11 前期後半～中期中葉の平底土器群(1) (縮尺: 49・50=1/6, 他=1/8)

出典: 1～3・7・16・21・22・25・31・32・40・46 帯広市宮本, 4・8・17・18・28・29・34・38・39 帯広市若葉の森, 5・12・13・33・42・43・47 幕別町札内I, 6 幕別町札内K, 9・48・49 芽室町西士狩4, 10・20 音更町十勝川温泉1, 11・26・30・35・41・44 清水町東松沢2, 14・36 帯広市大正1, 15 幕別町日新F, 19 音更町葎原2, 23・37 帯広市川西C, 24 帯広市三の沢1, 27 幕別町札内N, 45 足寄町鷺府7, 50 池田町十日川5, 51 芽室町美蔓

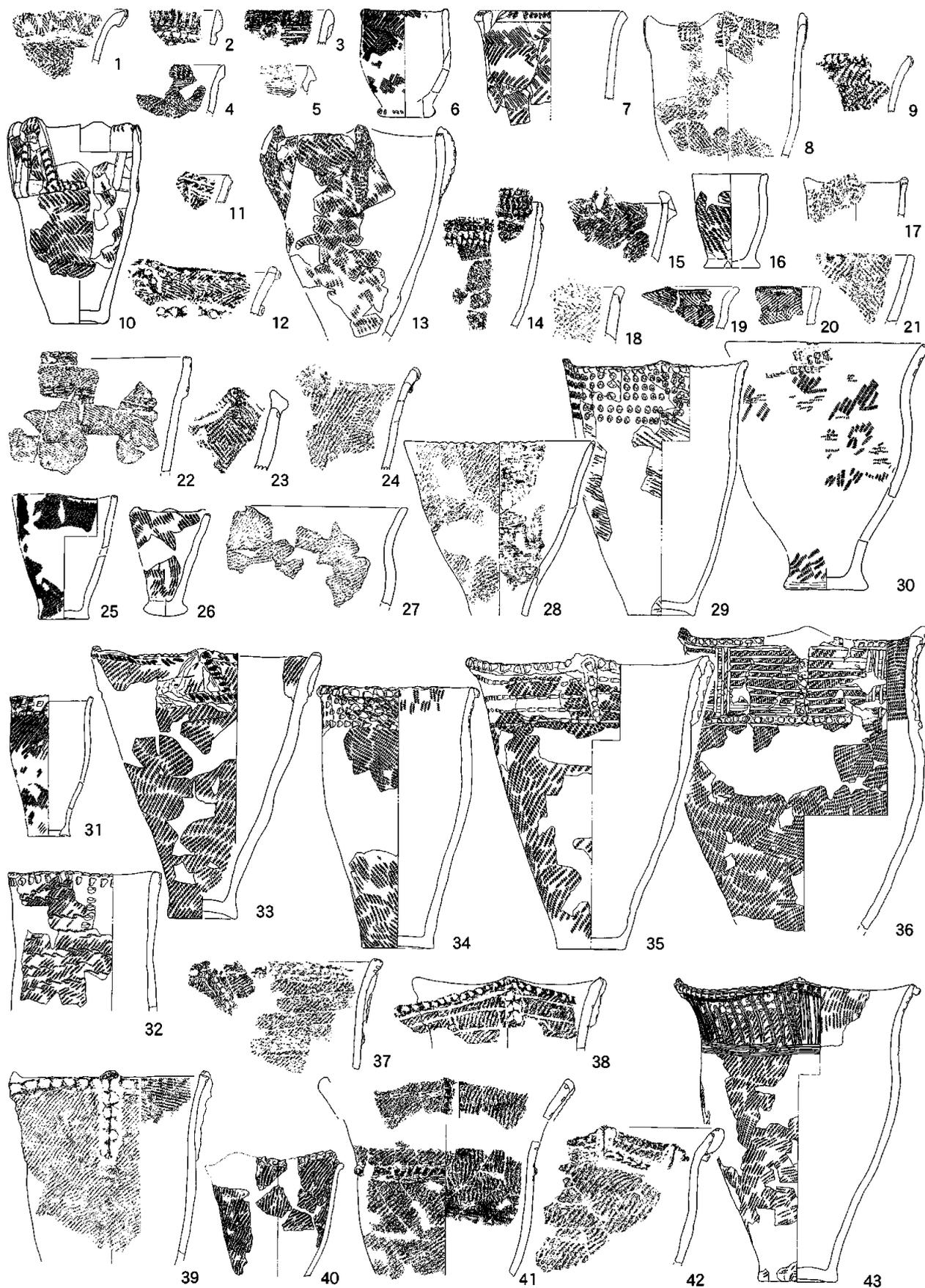


図12 前期後半～中期中葉の平底土器群 (2) (縮尺=1/8)

出典：1・5・13・18・21 幕別町日新F, 2・3 豊頃町高木1, 4・16・22・26・27・33・36・42 幕別町札内N, 6・15・25 帯広市若葉の森, 7 帯広市西, 8・10・14・17 清水町共栄3, 9・11 芽室町西士狩4, 12・19・20 音更町十勝川温泉1, 23 芽室町美蔓, 24 芽室町小林, 28・31・37 帯広市川西C, 29・32・34・35・38・39 池田町十日川5, 30 帯広市宮本, 40 清水町東松沢, 41 帯広市チョマトー, 43 芽室町北明1

c類：33～42は貼付をもち、貼付上に刻み、刺突、縄や指頭による圧痕が施文された一群。口縁は山形突起が多く、口唇に刺突、押引、爪形、沈線が施文される。37・38のように口唇直下に横位の貼付、口縁の波頂部より垂下する貼付、口縁部と胴部を区画する横位の貼付や沈線、押引が施されるものもある。区画内は横位の沈線や刺突、押引が数段施文される場合がある。

d類：43は口縁部の貼付上に押引文が施される。口縁は山形突起となり、口唇には刺突文や沈線文が施文される。口縁部の貼付上には押引が数段みられる。管見の限り十勝において唯一の資料である。

a類は口縁部の貼付上に縄の圧痕が施されることから円筒土器上層式の様式を残すものであり古相に、d類は口縁部の貼付上に数段の押引がみられることから北筒式土器の直前の段階に位置づけられると考えられる。

6 中期末葉～後期前半の土器群 (図13)

中期末葉から後期前半に位置する筒形器形で口縁部の肥厚帯や円形刺突に特徴をもつ北筒式土器群で75ヵ所の遺跡出土資料が報じられている³⁾。この土器群は十勝地域では佐藤ら(1985)によって3大別(十勝縄文Va～Vc期)された。また近年は各氏による細別編年が公表され(大沼1989・豊原1996・熊谷2008・工藤2008など)、十勝地域の当該土器群については山原敏朗(2001)、大矢義明(2007)によって集成された。

1～6は口縁部に断面三角形の肥厚帯が施され、胎土に繊維を含み、地文に結束羽状縄文が多用された古相の資料群で、トコロ6類(大沼1989)に相当するとみられる。器形は胴上半がくびれたもの(1・2・5・6)と直線的なものがあり、肥厚帯上に横位の押引が施されたもの(1～3)、貼付隆起帯が施され口縁に山形の突起が付せられたもの(1・2)がある。池田町林務署遺跡(池田町教委1972)には器高50cmを越す大型の復原個体がある。6は肥厚帯上に押引によるとみられる爪状の刺突が施文されたもので次段階への過渡的な雰囲気をもつ。幕別町札内K遺跡(幕別町教委2005)には3・4と同様の大振り円形刺突が施され、山形突起部の肥厚帯上に縦位の縄圧痕が施文された資料がある。

7～11は口縁断面は角形、肥厚帯は口唇に向かってやや薄くなり、肥厚帯上に縦位の沈線が施されたもの(7・9)、これと同類とみられる資料群で、大沼のトコロ5類を想定した。十勝地域での類例は少ない。この類は胎土に繊維をほとんど含まないとされるが、十勝の例は繊維を含むものが多いようである。11は口縁断面が角形になるこの類では新相とみられる資料。

12～21は幅広の肥厚帯が施され、この下位にナデなどによる無文帯が形成された、いわゆる北筒Ⅲ式のグループ。肥厚帯が発達し、肥厚帯上に縦位の隆起帯が4～数ヵ所施されたものと、隆起帯が施されず、肥厚帯の厚さが顕著とはいえないグループがみられる。前者の典型は12～14に示した資料で、12は縄圧痕、13は半截竹管内面による縦位の刻線が隆起帯上に施される。14は肥厚帯上にも円形刺突が施文され、地文は複節の斜行縄文。このグループの十勝地域での類例は多くはない。15～21は後者のグループ。21にみられるような肥厚帯直下に下方から突き上げるような刺突はⅢ式の段階で出現しV式まで続くといわれる(大矢2007)。地文は単節の斜行もしくは羽状縄文が多い。21は複節と単節縄文が交互に施文された例で、類例は音更町十勝川温泉1遺跡(音更町教委1997)にある。

22～29は口縁部肥厚帯が消失し、沈線やナデによって口縁部と胴部が区画されたグループで、29はいわゆる北筒Ⅳ式の典型とみられる。底部は高台状の上げ底となるものが多くなり、この特徴はV式まで続く。22～26は口縁に縦位の貼付が施されたもので、円形刺突は口縁部に施されたものと、この下位の無文帯に施されたものがある。

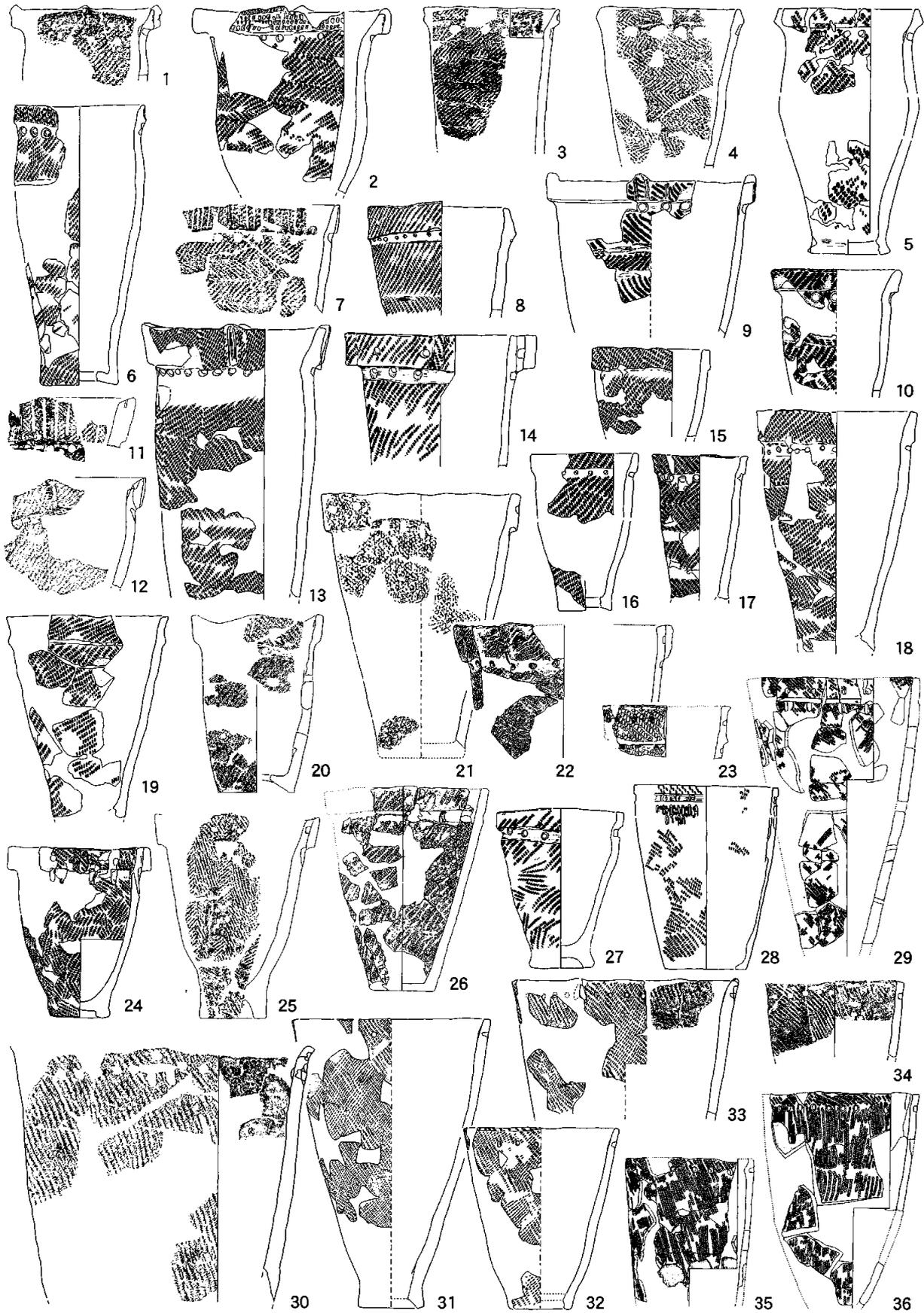


図13 中期中葉～後期前半の土器群 (縮尺≒1/8)

出典：1 池田町十日川5, 2・5・6・12・13・16～19・30 幕別町札内N, 3・4 幕別町札内K, 7・8 音更町友進, 9・10・21 清水町東松沢2, 11・22・23・26 音更町十勝川温泉1, 14・27 音更町饒原2, 15 幕別町日新F, 20 帯広市岩内1, 24 清水町共栄2, 25 音更町共進2, 28 帯広市宮本, 29・35・36 音更町駒場, 31～33 芽室町北明1, 34 鹿追町鹿追高校

30～36は口縁がやや外反気味の器形となり、口縁と胴部の区画が施されない北筒V式に相当する資料群で、地文の縄文は縦走気味のものが多くみられ、口唇上に縄文が施文された例も多い。この類は十勝地域では遍在的に分布する。

7 後期中葉～晩期前半の土器群 (図14)

北筒式土器群以降、幣舞式以前に位置づけられる土器群で、45ヵ所の遺跡出土資料が報じられている³⁾。この土器群のうち、後期中葉とみられる資料は稀薄であるが、突瘤文が施文される段階になる

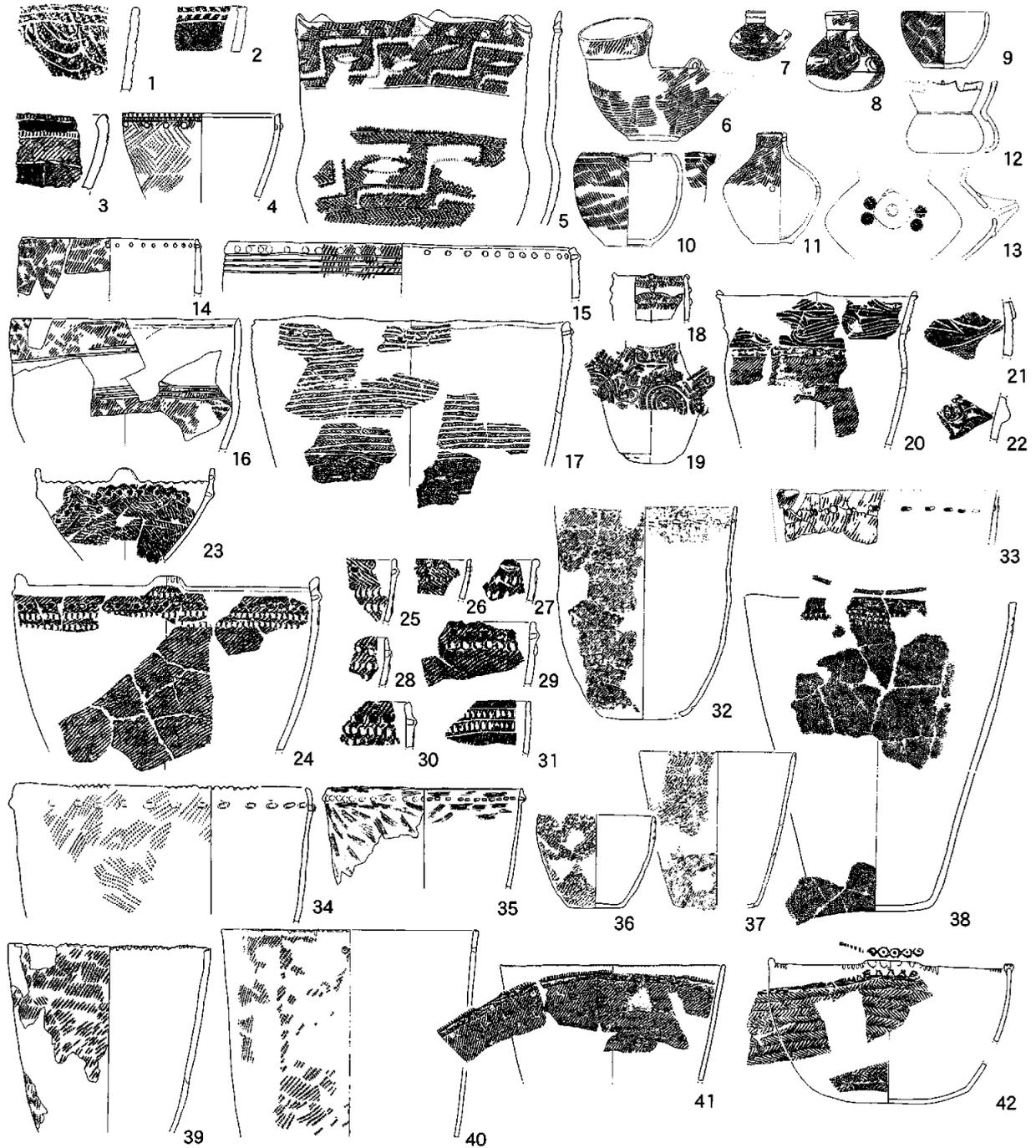


図14 後期中葉～晩期前半の土器群 (縮尺：1～3・21・22・25～31≒1/6, 他≒1/8)

出典：1 音更町葭原2, 2 足寄町鷺府7, 3・4 池田町池田3, 5～13 足寄町上利別20, 14～20・41 浦幌町十勝太若月, 21・22・25・26 幕別町LA, 23 浦幌町共栄B, 24 浦幌町瀬多来, 27 陸別町トマムB, 28～31・38 帯広市八千代地区, 32・36 幕別町札内K, 33 浦幌町平和, 34・35 音更町相生1, 37 帯広市大正1, 39 池田町十日川5, 40・42 帯広市暁

と足寄町上利別 20 遺跡（足寄町教委 1990）をはじめとするいくつかの良好な資料群が報じられるが、多くは断片的な資料・情報に止まる。この土器群の前半には突瘤文・貼瘤・沈線を主要な文様要素とする資料群があり、爪形文や刺突文が施文された緑町式と仮称された土器群（杉浦 1989）に相当するグループがこれに後続し、次段階へ移行するとみられる。

当該期の資料中、古い段階に位置づけられそうな資料は、2 条単位の平行沈線間に弧状沈線が施文された音更町葎原 2 遺跡（音更町教委 1987）出土のウサクマイ C 式相当とされた小型土器（1）があり、これに後続するとみられる資料は足寄町鷺府 7 遺跡（足寄町教委 1986）出土の平行沈線＋短刻線が施文された鯉瀬式相当とされた資料（2）がある。池田町池田 3 遺跡（池田町教委 1993）出土の口唇直下にキザミが施された資料（3・4）も古相の資料かとみられ、鹿追町上然別 1 遺跡（後藤ほか 1976）に類例がある。葎原・池田 3・上然別の各遺跡では地文＋I→Oの突瘤文が施文された資料も出土する。

5～13 は上利別資料群。5 は堂林式相当の深鉢、ほかに縄文＋突瘤文、これに沈線が加えられたものなどがある。集石遺構出土の注口・片口など異形土器を主体とした一括資料（6～13）は御殿山式相当とみられる。

14～20 は十勝太若月資料群（浦幌町教委 1974・75、佐藤 1980b）。縄文＋突瘤文、沈線、「ハ」字状の短刻、貼瘤、三叉文、無文帯＋縄文などバリエーションに富み、時間幅を有する資料群とみられる。三叉文の類例は幕別町 LA 地点（佐藤 1986b）、帯広市八千代地区 B 地点（佐藤 1980b）採集資料にある（21・22）。

23 は口縁に 4 ヶ所の突起が施され、突起部と口唇直下に突瘤文、この下位に弧状沈線と平行沈線が施文された浅鉢。24 は突起の内面に縦位の沈線が施され、口唇下に突瘤文、この下位に突引による爪形文が 2 段施されたもので、この 2 例は堂林式の新相もしくは後続する段階とみられる。

爪形文が施文された資料（25～31）は佐藤訓敏（1974・82・86b）によって浦幌町瀬多来、幕別町 LA、同町札内 B、陸別町トマム B、帯広市八千代地区資料が紹介されている。これによると爪形文はいずれも盛り上がり片側に寄るタイプで、突瘤や沈線と複合施文されたものが多いようである。

32～35 は横長や縦長の突瘤が施文された資料。38 は偽縄文が口唇・底面を含む全面に施文されたもので、施文具は草本類の茎かと思われる¹⁾。36～38 は口縁に 1～数段の刺突が施文されたもの。39～42 は晩期前半とみられる口唇にキザミや縄文が施され、口唇直下には幅の狭い無文帯をもち体部は地文のみの資料。42 の突起は 5 つの円盤状の貼付で横長に施され、地文は幅 1～2 cm 単位の羽状縄文が縄端の稜を明瞭に施文される。

爪形文が施文された資料は後期末葉～晩期初頭、32～42 に示したタイプは晩期前半に位置づけられるとみられるが、資料の充実を俟ちたい。

8 晩期後半の土器群（図15・16）

幣舞式・緑ヶ岡式に相当する縄線文・沈線文系の土器群で、50 ヶ所の遺跡出土資料が報じられている³⁾。十勝地域の幣舞式相当は Ta-c 火山灰を挟んで出土する例が多い。また幣舞式相当では、縄線文が主要な文様要素となる資料が多数であり、沈線文の資料は少数である。この土器群の前半には幕別町札内 N 遺跡（幕別町教委 2000）資料を典型とする刺突文・縄線文を特徴とする美々 3 式（工藤 1992）相当の土器群、後半には足寄町上利別 20 遺跡、音更町相生 1（音更町教委 1986）などから出土した緑ヶ岡式に相当する資料群が相当するが、後者の調査例は少ない。

1～35 は刺突文・縄線文資料群。1～16 は深鉢もしくは甕形、17～35 は浅鉢・舟形など。1～7 は口唇直下に刺突文もしくは縄端圧痕（6・7）が施されたもので、2・3 は屈曲する胴上部にも刺

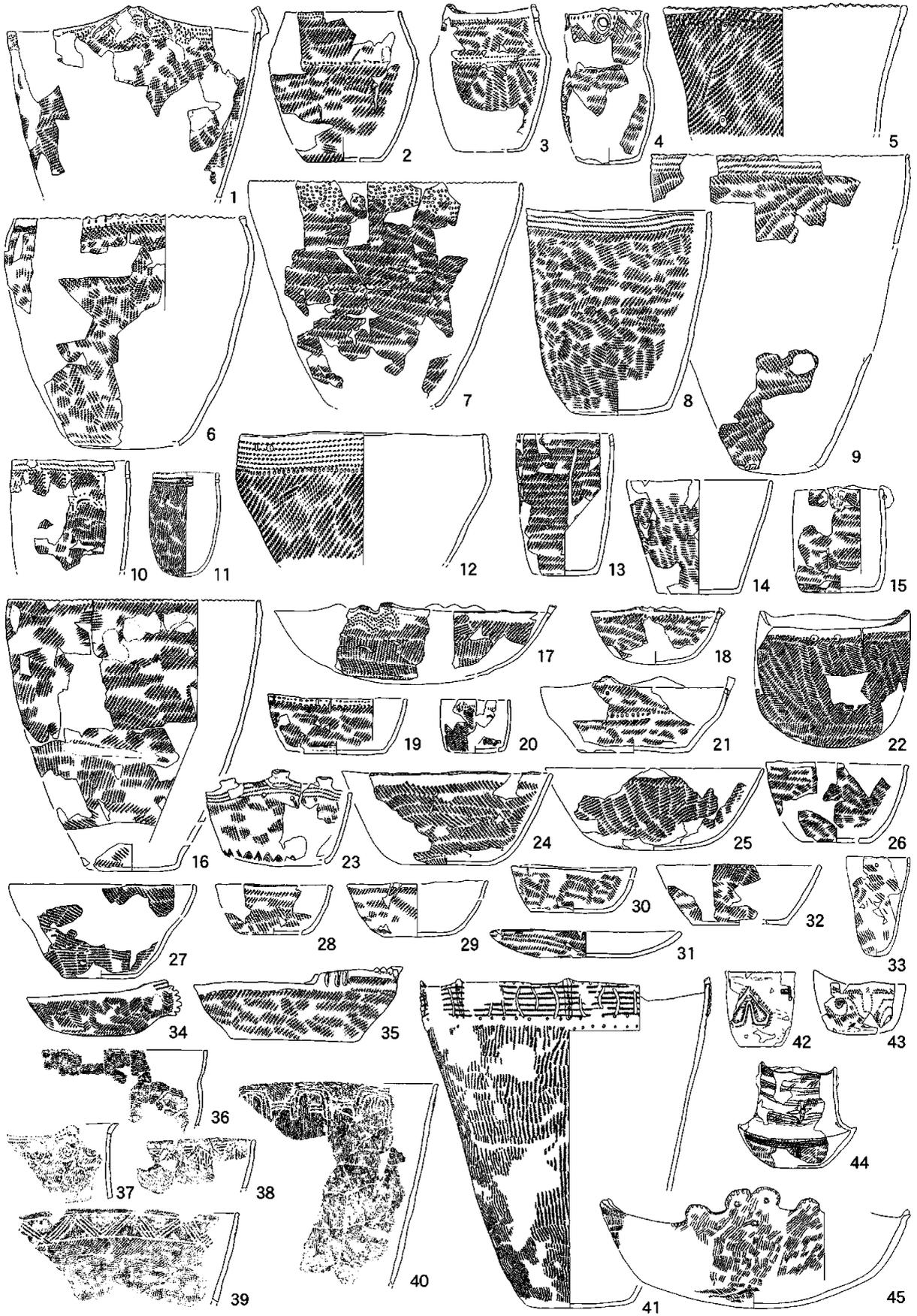


図15 晩期後半の土器群 (1) (縮尺 \approx 1/8)

出典：1～4・6～8・10・13～40・42・43 幕別町札内N，5・11・12 幕別町札内K，9 新得町屈足11，41 池田町美加登神社，44 池田町十日川5，45 帯広市大正7

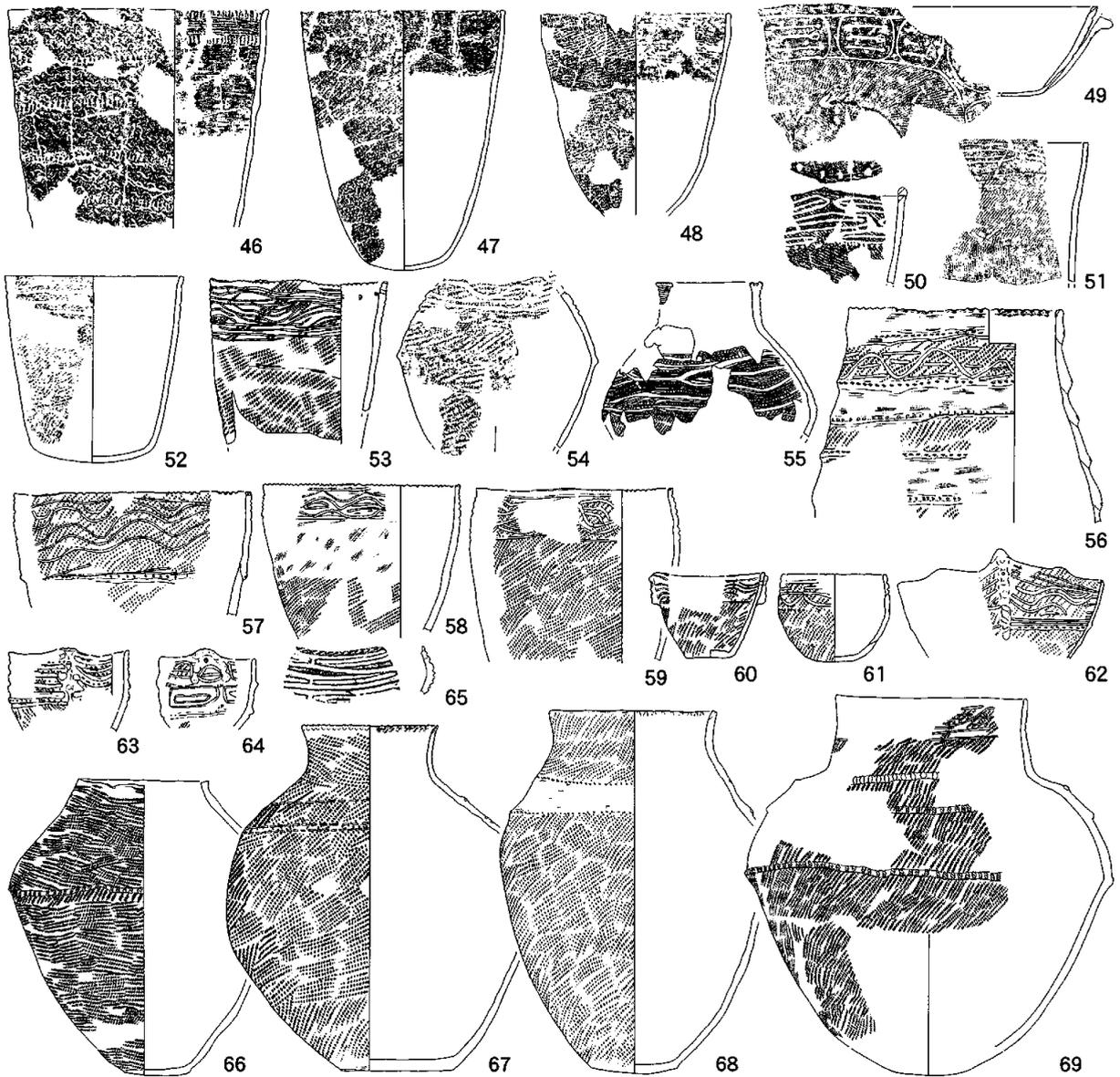


図16 晩期後半の土器群 (2) (縮尺=1/8)

出典：46～48・50～52 足寄町上利別20, 49・53～55 幕別町札内N, 56～69 音更町相生1

突が施される。8～12は口唇直下の無文帯に横位の縄線文が数段施されたもの。12は縄線文の下位に刺突列が横走る。この段階の刺突文は、前段でみられた刺突とは異なり、細かな列点状になるようである。13～16は地文のみの資料、15は耳状の貼付が施される。17～22は刺突が施されたもので、施文部位は突起下部(17)、口唇直下、胴中部(21)。23は突起間に「×」状のキザミが施され、口縁部には縄線文が3条巡り、底部付近は鋸歯状の沈線が施文される。24～32は地文のみで、口唇直下に無文帯が形成されたもの(24～30)が多い。34・35は舟形の浅鉢、34の舳先部の口唇直下には2条の縄線文が施文される。

36～45は沈線や縄線文で図形様の文様が施された本格的な幣舞式のグループ。36～40は口縁部に沈線(36)・縄線文(37～40)で図形様の文様が施されたもの。41は口縁と胴部が無文帯で区画され、口縁には横位の縄線文と縦位の弧状・直線の沈線が施文される。42・43は胴部に幾何学様の構成の文様が施されたもので、次段階の可能性はある。44は頸部には縄線文、肩部には細かな刺突列と沈線が施文された舟形土器。45は突起内面に同心円状の縄線文が施文された大型の浅鉢。

46～69 は緑ヶ岡式相当とみられる資料群。46 は貼付による隆帯上に縦位の短い貝殻腹縁文が多段に、この間に綾絡文が施され、口縁内面には2段の貝殻腹縁文とこの間に横位の条痕が施されたもの¹²⁾。47・48 は縄文のみが施文され、内面には横位の浅い条痕が施される。49～51 は沈線もしくは縄線文(51)で長円形～方形区画の文様が施されたもの。52～62 は平行沈線間に連続した波状沈線が施文された終末段階とみられるグループ。63・64 の舟形土器は変形工字文風に施文される。65 は浮文で工字文風に施文された資料で、大洞A'式相当とみられる。66～69 は相生1遺跡出土の埋設土器。

III おわりに

十勝地域における考古学的調査は斉藤米太郎により1930年代から手がけられた浦幌町新吉野台細石器遺跡の発掘調査を嚆矢とし、今日までに100カ所を越す遺跡の調査が行なわれている。これに分布調査等による出土遺物の紹介がなされた遺跡を加えると約170カ所の遺跡・地点の遺物に関するデータが公表され、この9割以上から縄文土器が出土している。本稿では、これらのデータをもとに復原個体を中心に各様式・型式の特徴を示す資料を集成し概要を紹介することに努めた。紙片の都合で今回提示できなかったデータ類は追って明らかにしたい。

十勝においては、他地域と同様1980年代から発掘ラッシュが始まり、およそ四半世紀にわたって毎年のように多くの緊急調査が行なわれてきたが、この状況は昨今の景気低迷と大規模公共工事の減少とともに終焉を迎えた。これを機に、蓄積された資料を基に研究を深化させることが我われの使命であろう。

本稿の執筆にあたり、山原敏朗氏には図版に掲載した下大樹遺跡出土土器の写真の提供をはじめ、さまざまなご教示・ご協力をいただいた。また資料観察等で多くの機関・研究者に便宜を図っていただいたこと、さらに日頃から多くのご指導をいただいている学兄各位に感謝を申し上げる。

註

- 1) 1983年度以降に発掘調査・試掘調査・工事立会などが行なわれ調査結果が公表された遺跡数。このうち縄文時代の遺物が出土した遺跡は73カ所ある。これ以前に調査が実施され、結果が公表された遺跡は25カ所あり、このうち縄文時代の遺物が出土した遺跡は19カ所を数える。
- 2) 底面に貝殻背圧痕をもつ資料がサハリン南部東海岸のスラヴナヤ4遺跡から出土することが明らかとされ、テンネル・曉式土器群との関連が指摘された(ヴァシレフスキー A.A. ほか 2008)。この土器群の道内での分布状況は古期～新期段階を通して十勝・釧路地域を中心とするとみられ、古期段階では道西南部まで拡がりをみせる。しかし道北部での様相は不明であり、この地域での状況の解明が当該土器群の系譜を考える上で不可欠である。
- 3) 発掘・分布調査報告、採集資料紹介等で出土土器が図として公表された遺跡数。
- 4) 大正6遺跡出土土器内面付着炭化物のAMS年代は9,200～9,500 yBP、八千代A遺跡の曉I群の典型資料を伴う遺構炭化物試料は8,200～8,300 yBPが示された(文末表)。試料種の違いによる海洋リザーバー効果を考慮しても両者には数百年の開きがあるものとみられる。
- 5) 図4掲載の下大樹遺跡出土資料と調査報告書(大樹町教委1965)との対応は、1:土器資料の注記は「M10」、拓影M17が本資料とみられる(器高23.2 cm)、2:報告書写真図版I-76、拓影IV-44(器高26.8 cm)、3:M12・13(器高24.1 cm)。いずれも大樹町教育委員会蔵。
- 6) 調査報告書Y1に対応(器高18.3 cm)。大樹町教育委員会蔵。
- 7) 北海道大学蔵。山原敏朗氏のご教示による。
- 8) 遺構確認調査出土資料。この調査では口縁部破片の観察からおよそ500個体が出土した。なお、本稿で図示した図5-24～34のうち、25・27・31以外は未報告資料である。
- 9) 調査報告書(大樹町教委1965)Y2に対応(器高19.0 cm)。大樹町教育委員会蔵。
- 10) 調査報告書(大樹町教委1965)M4に対応(器高18.0 cm)。大樹町教育委員会蔵。
- 11) 佐藤訓敏氏採集の未報告資料、採集地点は帯広市八千代地区C地点(佐藤1980)。器高39.6 cm、口径34.4 cmを測る大型の深鉢。底面は丸底気味で口縁に向かって直線的に開く器形。刺突は下方からやや突き上げ気味に3段施される。帯広百年記念館蔵。
- 12) 筆者の実見による。

引用文献 (調査報告書は省略した)

- 明石博志 1965 「曉遺跡」『郷土十勝』第5号 1-46頁 帯広市教育委員会・十勝郷土研究会
- 遠藤香澄 2008 「縄文系平底土器」『総覧 縄文土器』72-77頁 アム・プロモーション
- 大沼忠春 1986 「施文原体の変遷—東釧路式土器—」『季刊考古学』第17号 雄山閣
- 大沼忠春 1989 「北筒土器様式」『縄文土器大観』1 339-342頁 小学館
- 大矢義明 2007 「5. まとめ」『共進2遺跡』77-86頁 音更町教育委員会
- 北沢 実 1994 「Ⅱ 八千代A遺跡第1地点遺構外の土器—絡条体圧痕が施文された「曉式土器」群」『池田3遺跡—統一』70-75頁 池田町教育委員会
- 北沢 実 1999 「縄文早期平底土器群の様相」『シンポジウム「海峡と北の考古学」資料集1』273-274頁 日本考古学協会
- 北沢 実 2008 「テンネル・曉式土器群 貝殻沈線文系平底土器」『総覧 縄文土器』54-59頁 アム・プロモーション
- 工藤研治 1992 「6 まとめ」『美沢川流域の遺跡群XV』北海道埋蔵文化財センター調査報告77 65-67頁
- 工藤研治 2008 「北筒式土器」『総覧 縄文土器』522-529頁 アム・プロモーション
- 熊谷仁志 2008 「Ⅳ 編年研究の現状 北海道地方」『縄文時代の考古学』2 123-144頁 同成社
- 後藤秀彦・佐藤訓敏 1975 「浦幌新吉野台細石器遺跡出土の遺物」『浦幌町郷土博物館報告』第6号 15-20頁
- 後藤秀彦・菅 訓章・佐藤訓敏 1976 「鹿追町の遺跡」『鹿追町考古学研究報告』I 18-35頁 鹿追町考古学研究会
- 後藤秀彦 1991 「浦幌式土器について」『十勝考古学とともに』29-42頁, 十勝考古学研究所
- 後藤秀彦・山原敏朗 2008 「条痕文系平底土器」『総覧 縄文土器』60-65頁 アム・プロモーション
- 佐藤訓敏 1973 「十勝の遺跡Ⅰ—浦幌町平和遺跡出土の遺物について」『浦幌町郷土博物館報告』3 2-4頁
- 佐藤訓敏 1974 「北海道幕別町赤井台地遺跡の遺物」『史峰』4 24-28頁 新進考古学同人会
- 佐藤訓敏 1979 「十勝の遺跡Ⅲ—縄文後期末晩期初頭の土器群(1)」『十勝考古』3 15-16頁 十勝川流域史研究会
- 佐藤訓敏 1980a 「樽前火山灰 Ta-d層と縄文早期—「曉式土器」群の編年の位置をめぐって—」『北海道考古学』第16輯 15-32頁
- 佐藤訓敏 1980b 「十勝の遺跡Ⅲ—縄文後期末晩期初頭の土器群(2)」『十勝考古』4 8-14頁 十勝川流域史研究会
- 佐藤訓敏 1982 「十勝の遺跡Ⅲ—縄文後期末晩期初頭の土器群(3)」『十勝考古』5 10-12頁 十勝川流域史研究会
- 佐藤訓敏・柴田信一・大矢義明・北沢 実 1985 「第1節 遺物の分類・編年」『帯広・曉遺跡』17-26頁 帯広市教育委員会
- 佐藤訓敏 1986a 「第7章 結語」『帯広・宮本遺跡』159-162頁 帯広市教育委員会
- 佐藤訓敏 1986b 「佐々木茂(考古)コレクション3—幕別町の遺物—」『帯広百年記念館紀要』第4号 13-30頁
- 佐藤訓敏 1987 「「宮本式土器」の編年に関する一考察」『葭原2』113-126頁 音更町教育委員会
- 杉浦重信 1989 「第3節 富良野地方の縄文晩期の編年について」『西達布2遺跡』64-73頁 富良野市教育委員会
- 豊原熙司 1996 「北筒式土器の型式認識について」『北海道考古学』第32輯 35-47頁 北海道考古学会
- 西澤千鶴 2000 「第7節 Ⅱ群土器について」『芽室町小林遺跡—第5次発掘調査報告書』175-184頁 芽室町教育委員会
- 西澤千鶴 2004 「第6節 若葉の森土器群について」『帯広・若葉の森遺跡』155-162頁 帯広市教育委員会
- 山原敏朗 2001 「第6章 結語」『帯広・岩内1遺跡』39-44頁 帯広市教育委員会
- 山原敏朗 2007 「北海道東部における更新世/完新世移行期の石器文化」『公開シンポジウム「縄文文化の成立」予稿集』8-26頁
- 山原敏朗 2008 「更新世末期の北海道と完新世初頭の北海道東部」『縄文文化の構造変動』35-52頁 六一書房
- ヴァシレフスキー A.A.ほか 2008 「2003~2007年におけるサハリン国立大学による考古学調査」『2008年度遺跡調査報告会資料集』71-83頁 北海道考古学会

表1 十勝地域のAMS法による放射性炭素年代測定値

時期	遺跡名	遺構	試料	$\sigma 13$	年代値(BP)		暦年較正 (Cal.BP)	分析番号
北 筒	共 進 2	住居 2 床焼土	炭化物	-25.9	3,420±40	補正	3820-3580	Beta-218304
網 文	大 正 7	住居 1 覆土	炭化木片	-27.3	6,000±40	補正	6920~6730	Beta-205854
		住居 3 床面	炭化物	-26.3	5,870±40	補正	6750~6630	Beta-205856
		墓96	炭化物	-26.2	5,800±40	補正	6680~6490	Beta-129927
	小 林	墓98	炭化物	-26.3	5,740±40	補正	6650-6430	Beta-129928
		墓99	炭化物	-26.8	5,770±40	補正	6685-6465	Beta-129929
大 正 8	住居 2 床 木炭片	炭化物	-26.4	5,750±40	補正	6660-6440	Beta-226593	
東 釧 路 IV	大 正 8		土器付着	-22.8	6,390±50	補正	7420-7250	Beta-226595
			土器付着	-24.7	6,510±40	補正	7480-7330	Beta-226598
			土器付着	-23.4	6,630±70	補正	7610-7420	Beta-226599
中 茶 路	大 正 8		土器付着	-19.5	7,270±40	補正	8180-8000	Beta-226590
			土器付着	-20.7	7,030±40	補正	7950-7790	Beta-226597
東 釧 路 II・III	大 正 8	住居10床炭化物集中	炭化物	-25.6	7,030±40	補正	7950-7790	Beta-226591
		住居 8 床焼土	炭化物	-28.4	6,900±40	補正	7830-7670	Beta-226592
			土器付着	-24.7	7,060±40	補正	7960-7830	Beta-226588
			土器付着	-24.6	7,120±40	補正	8010-7870	Beta-22589
			土器付着	-23.8	7,110±40	補正	8000-7860	Beta-22594
			土器付着	-22.6	7,470±40	補正	8300-8190	Beta-226596
石 刃 鎌	大 正 3	住居 2	炭化材	-25.4	7,350±40	補正	8200~8040	Beta-194632
		住居 2	炭化材	-24.9	7,420±40	補正	8340~8160	Beta-194633
		住居 2	炭化材	-24.8	7,340±40	補正	8200~8030	Beta-205862
		住居 2	炭化材	-26.0	7,370±40	補正	8300~8260, 8210~8110, 8090~8060	Beta-205863
		住居 3	土器付着	-23.4	7,720±40	補正	8580~8410	Beta-205864
		住居 3	土器付着	-23.0	7,880±40	補正	8960~8940, 8850~8840, 8780~8580	Beta-205865
		住居 3 覆土	土器付着	-22.2	7,720±40	補正		IAAA-41608
		住居 3 覆土	土器付着	-24.4	7,810±40	補正		IAAA-41609
	大 正 7	IV群包含層	炭化物	-26.2	7,420±40	補正	8340~8160	Beta-205847
			土器付着	-20.6	7,930±40	補正	8990~8610	Beta-205848
			土器付着	-22.8	7,630±40	補正	8440~8370	Beta-205849
			土器付着	-24.5	7,620±40	補正	8440~8360	Beta-205850
			土器付着	-22.7	7,510±40	補正	8390~8200	Beta-205851
		住居 5 覆土	土器付着	-20.2	7,840±40	補正		IAAA-41610
		住居 5 覆土	土器付着	-19.4	7,780±40	補正		IAAA-41611
		住居 2 床面	土器付着	-25.4	7,580±40	補正		IAAA-41612
			土器付着	-20.5	7,900±40	補正		IAAA-41613
		住居 5 炉	炭化物	-25.0	7,300±40	補正	8180~8010	Beta-205852
		住居 5 覆土	炭化物	-24.8	7,320±40	補正	8190~8020	Beta-205853
		包含層	炭化物	-26.8	7,280±40	補正	8170~7990	Beta-205857
暁 式	大 正 6	スポット 1	土器付着	-24.2	9,260±40	補正	10550~10260	Beta-194635
		スポット 2	土器付着	-21.0	9,550±40	補正	11100~10700	Beta-194636
	大 正 7		土器付着	-22.3	9,200±40	補正	10490~10250	Beta-205846
		Loc.4-住居11炉	炭化物	-25.8	8,230±40	補正	9380~9370, 9300~9040	Beta-205858
		Loc.4-住居 5 炉	クルミ	-26.5	8,240±40	補正	9400~9360, 9310~9050	Beta-205859
		Loc.2-住居 9 炉	クルミ	-26.5	8,260±40	補正	9410~9120	Beta-205860
		Loc.2-住居 9 炉	クルミ	-25.2	8,193±35	補正	9244~9173, 9143~9085, 9051~9033	NATA2-7678
	川 西 C	Loc.4-住居11炉	炭化物	-25.3	8,256±36	補正	9297~9196, 9182~9135	NATA2-7679
		P8 地床炉	木炭		8,600±130	補正	9020~8760	Beta-205861
		P11地床炉	土器付着		8,700±140			NUTA-2953
		P18地床炉	木炭		7,630±110			NUTA-2955
		P35地床炉	木炭		8,070±130			NUTA-2956
		P41貯蔵穴	クルミ		7,620±100			NUTA-2957
		P65地床炉	木炭		7,720±110			NUTA-2958
P77地床炉	木炭		8,270±100			NUTA-3021		
草 創 期	大 正 3		土器付着	-23.5	12,400±40	補正	15040~14770, 14370~14300	Beta-194626
			土器付着	-24.0	12,220±40	補正	14290~14110	Beta-194627
			土器付着	-23.7	12,350±40	補正	14350~14270	Beta-194628
			土器付着	-22.6	12,460±40	補正	15150~14680, 14410~14330	Beta-194629
			土器付着	-23.4	12,210±40	補正	14280~14110	Beta-194630
			土器付着	-23.3	12,130±40	補正	14140~14080	Beta-194631
			土器付着	-21.6	12,290±60	補正		IAAA-41603
			土器付着	-23.2	12,330±70	補正		IAAA-41604
			土器付着	-22.1	12,120±60	補正		IAAA-41605
			土器付着	-21.7	12,470±60	補正		IAAA-41606
	土器付着	-22.5	12,160±60	補正		IAAA-41607		

(一般に推定される年代値との乖離が著しい測定結果は除外した)